東方龍帰章～Return of east Legendry～

朝霧=Uroboross

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

―かつて、其は妖の神と呼ばれし復讐鬼がいた。

―かつて、復讐を負え、龍に仕え、八百万の神々に仕えながら贖罪を果たす気高き武人がいた。

その男は、とある”里”を創ったとされる賢者の一人にして、その膨大なまでの力によって神の座を返上し、人として輪廻の輪に乗った。

それから幾星霜、かつての記憶と力を取り戻し、己の故郷と定めし”里”へと帰るため、男は古くからの友らと向こう側へ歩みだす。

――これは、遥か昔に生きた龍の武人が、故郷たる”幻想境”へと帰りつく物語――。

２０２１年１月１日より更新開始。
定期周期：投稿より二週間後の金ｏｒ土曜２３：００
※作者の予定・体調等によって遅れたり早まったりする場合があります。

目次

壱・別れと雨 ―――― 1
弐・帰郷 ―――― 7
参・闇の子 ―――― 12
肆・人里にて ―――― 17
伍・方針 ―――― 24
陸・吸血鬼異変　Act1 ―――― 30
漆・吸血鬼異変　Act・2 ―――― 36
捌・吸血鬼異変　Act・3 ―――― 45
求・スペルカードルール採用 ―――― 51
スペカルール導入後編（＝本編）
拾・紅霧異変にて ―――― 58
拾壱・春雪異変にて ―――― 62
拾弐・永夜異変にて ―――― 67
閑話・壱　庭師の稽古 ―――― 74
懐古・刻縁：護れなかったもの 82
拾参・鬼の大宴会／花の異変 ―――― 92
拾肆・間欠泉異変のその後 ―――― 100
拾伍・神仏宗教合戦：裏 ―――― 106
拾陸・都市伝説なるもの ―――― 115
拾漆・宣戦布告 ―――― 124
拾捌・登場人物　設定拾 ―――― 131

壱・別れと雨

――雨が降っていた。ざぁざぁと降りしきる雨だった。周りには真っ赤な池ができていて、目の前には昨日まで、その暖かな手で撫でてくれていた者達がいる。

立っているのはただ一人。産みの親ならずとも、その暖かな心で育ててくれた皆。私は――――ただ茫然とするばかりだった。

泣いた、嘆いた。嗚咽を漏らし、決して止まぬ慟哭を挙げた。雨は、全てを洗い流すように降っていた――――。

――――私は、森に立っていた。隣には、不可思議な狭間に座る者。奥には、その背に扉を背負う者。彼方には、長い髪を流す赤衣の巫女がいた。数多くの者がいた。

空が覆われる、”龍”が姿を見せる。我らは、その儀式を始めていく。私もまた、かねてより練っていた術式を展開していく。

「――!!貴方その術式じゃぁ――ッ!!」
「かまわぬ。そこは私には過ぎたる地だ。私はそちらには行けん」
穏やかな笑みが、自然と浮かぶ。私は、傍目からはどう見えるのだろうか。まぁ、それも構わぬのだが。
蹴り飛ばすように、彼女を結界の中へと突き飛ばす。蹴るのはどうか許して頂きたい。今は手が離せないのだから。
「お前はそちらに居ろ。そこで我らの故郷を見守ってくれ」
「ッ……はぁ。貴方も難儀な性格ね。……待ってるわよ、『東守』サマ」
「ふっ……それは我が主のことだ。私にはそれは相応しくなかろう」
そうして結界が出来上がる。姿がかき消えていく彼女は、ただただ穏やかな笑みを浮かべて、どうしようもない者をみるかのような寂しげで慈悲深い目を持っていた。
そういう彼女だからこそ、あの地の管理者に相応しい。あのような者だからこそ、彼の地は任せられる。
「後は頼むぞ――――”紫(ゆかり)”」
結界が完全に閉じきる。私の声は、きっと届いてはいないだろう。だが、それでいい。私の役目は、これで終わった。
復讐を終え、恩に尽くし、贖罪に走った我が生は、この結界を完成させたことで区切

りが付いた。

――修羅なれど　我が生終にて　桜花散る――善き生であった――――。

その日も雨が降っていた――――。

――その結界。数多の賢者整えし泡沫を護りし結界。その名後に『博麗大結界』と謂われ、其の結界に護られし地、後に『幻想境』と呼ばれる――――。

かつてより空気は汚れ、鉄の森が立ち、噴煙が方々にて吹き上がりし現代。近代化が進んだ現代の森の中、二人の若い男らが、乾いた音を響かせながら立ち合っていた。

だが、片方が足をもつれさせた不意を突き、蒼衣の青年が首元に木刀を向ける。倒れた少年は、苦笑いを浮かべて両手をあげる。

「参りました……。やはりお強いですね、お師様」

「私なぞまだまだよ。かく言うお前も、現代の者にしては腕が良くなったぞ――”朝霧”」

『朝霧　龍介』――私が現代にて依り代とし、そして内にて眠る私に気づいて再び甦られせてくれた人の子の友にして我が弟子。持てる力や情報網を使って私の力を取り戻そうとしてくれた親しき友。

肉体を取り戻し、稽古をつけること早三年。ここまで強くなったことに、私はどこか誇らしかった。

「……当主、期、満る……」

「む……そうか」

「……時が来ましたか」

古くからの友――『葛城の土蜘蛛』より報告を受け、私は出立の支度をする。とは言っ

ても、ほぼ全て整っていたあとであった。
　我が友にして弟子たる朝霧は、どこか嬉しそうに、そしてどこか寂しげに言葉を紡ぐ。これにて我らは別れ、互いに最早二度会えぬ時を過ごすこととなる。
「世話になった。達者でな、友よ」
「あぁ、今までありがとう。元気でな――”刻縁”」
　そうして、二人は背を向き合うように踵を返す。蒼衣の青年はさらに深く森の中へ、若き少年は広く拓けた世界にある自らの家へ。
「断ち、映し、その姿を顕せ――『三種の神器』」
　青年が持つ古風な一振りの両刃刀。それを虚空に一閃させると、たちまち不可思議な狭間――『スキマ』が開く。
　いつの間にか青年の後ろには、付き従うように四人の男女が現れる。
「行くぞ、帰郷する」
「「「御意に」」」
　これよりは、幻想に消えし者達の里帰りにして、彼らの帰りし故郷の出来事。これを知るのは、彼らと親しかった者達のみ。
　故に、刮目せよ。故に、瞑目せよ。彼らは還るのだ。古き懐かしき故郷へ。遠い遠い旅路を終えて、今、彼らは帰郷する――――。

――あぁ、今日も雨が降るのだな――

弐・帰郷

深く、静けさが辺りを支配する夜の森。何人も訪れることのない無縁の古仏達が眠るこの地に、幾人かの姿が靄のように現れる。

蒼衣の剣士を先頭に、白衣の識者、黄土の妖忍、金面の無頼、死相の花魁。最後に三足の烏が剣士の肩に留まり、彼らは一顕界（帰郷）した。

「……人の手に侵されておらぬ、澄んだ気よな。好い」

「今は一私（わたくし）共しかいないのですから、素でよいのでは?当代」

「そうですわ旦那様。いつまでもそうですと肩が凝りません?」

苦笑いする識者と、袖で口元を隠しふふふと笑う花魁。その二人に、剣士はただ眉を下げて苦笑する。

「そうか、それもそうだな。しかしまぁ、彼奴がすぐに来れんのは意外であったな」

そう回想するは、かつて邸宅にて浴びるほどに酒を呑み、大笑いをする大男――否、巨漢の鬼のことであった。

誰とも言わず、皆歩みを進めながら、彼の者を思い出す。酒を呑み、馬鹿騒ぎを起こ

し、その度に悪びれずまた賑やかしをする彼の者を。
「……『金熊』は自営の酒が荒稼ぎしてしまったが故に遅れる、と」
「ん、そうだったな。やれやれ、あれほど頃合いをよく見ておけと言ったのだがな……」
ため息と苦笑いが一緒くたに出る一同。愉快そうに笑い声をあげながら「後で行く」と言った鬼に、ただただ呆れるばかりであった。
周囲は少しばかり開けた細道から、いつしか深い森へと映り変わっていく。あちらこちらから化け茸のものと思われる胞子が飛来するが、識者が張った結界に全て遮られていた。
「随分とまぁ様変わりしましたねぇ、ここも」
「そうは言うが、昔のここを知るのは私とお前ぐらいであろうよ」
辺りのざわめきを他所に、他愛のない話をしていく。
彼らが吹き起こした風の、行く先知るゆえもなく――――――。

人里外れた、この幻想郷の端に位置する神社。その屋根の上で、黄昏るように夜半の月を見ていた女性が一人。膨大なまでの妖気を、人に知れることなく収めるこの女性こそ、幻想郷にて賢者とされる一人。『八雲　紫』その人である。

そんな彼女は今、この幻想郷にて不可思議なことが起こっていると感じていた。結界に綻びができた。が、一瞬で跡形もなく修復された。これを異常とせずに何と言うのだろうか。

「どうした、紫」

背後より呼び掛けられる声。振り向けば、そこには見知った、傷だらけの痛ましい姿でありながらも、堂々とした強者の気配をにじませる巫女がいた。

紫は、現状さしたるものはなけれども、何かしらはあると見て式神を放ち、巫女にはなんでもないかのように肩をすくめる。

「なんでもないわ。ただ問題が山積みなのが億劫なだけよ」

「それはお前のだらしなさのせいだろうに」

自らが唯一気の許す人間の友が放った容赦のない言葉に、紫はただ頬を膨らますようにして拗ねる。

まるで子供のようだと肩をすくめる巫女。風邪は引くなよ、とだけ言い残し、屋根か

ら降りていった。その後ろ姿を見送ってから、紫はまたしても思案にふける。
（この幻想郷の結界を、的確に一部分だけを裂いて即座に修復……そんな芸当、できる相手は絞られる……）
そうして、この”世界”が出来上がる直前に別れた、あの賢者の一人を思い出す。
――後は頼むぞ、紫――。そう言い残して別れた、この幻想郷でも屈指の賢者だった者。高天原に一席を置きながらに、剣術の極致を体現した者。その後ろ姿を、この現状から錯覚する。
「貴方だと言うの……？本当に、帰ってきたのかしら……刻縁」
その問いに答えるものは誰も居らず、ただ独り空しく夜の闇の中へと消えていく。その胸中に抱くは懐古か、はては羨望か。それを知る者未だに居らず――――。

これより、彼らを渦中に幻想郷は進んでいく。だが、彼らを見つけることは有り得ないだろう。

それ故に彼らは、いずれ来る時まで身を隠し続ける。
龍に仕え、神に遣え、人と愛し、裁き、導く彼らを。人の世に結して語られぬ其の名を――――。

「お初にお目にかかる。我が名をば名乗り上げるが故、口上御免つかまつる」

参・闇の子

人も獣も妖すらも近寄らぬ鬱蒼とした森の中、迷うことを知らぬかと言うように突き進む幾人の影。

化け茸の放つ毒胞子さえその歩みを止めることは敵わず、先へと進んでいた。

「しかしまぁ、ここまで鬱蒼としておりましたかねぇ……」

「そんなに変わっているのかしら?」

識者の独りごちるよえな呟きに、花魁が反応する。先頭を行く剣士はともかくとして、忍と無頼の二人はただ静かに、その足を進めていた。

花魁の問うたことに、剣士が反応し、先を見据えながら返答する。

「うむ。昔はここは多少気の流れが濃いだけの森であったのだ。どう言った理由でこうなったのかは詳しくは解らんがな」

「そうですのね。とは言え、誰にも出会わないというのもおかしな話ですわね」

納得したそぶりを見せるも、すぐさま怪訝そうに辺りを見回す花魁。その様子に、今の今まで閉口していた無頼が口を開く。

「軽率な行動は控えろ『狂骨』。何もないとは言え、様子見しているだけやも知れん」
「あら、これでもすぐ対応できるようにしているのですよ？『夜九（やぎゅう）』さん。心配性もほどほどになさいな」
　腰に三本の刀を差す無頼が咎めるも、花魁は扇子を口元で広げ、目を細めて皮肉を返す。我関せずと沈黙し続ける忍。
　そんな様子に苦笑いを浮かべるばかりであった剣士だったが、不意に何かしらの気配を感じ、片手を挙げて気配を変える。
　それに合わせて和気あいあいとしていた空気は一転し、警戒体勢に入る。森の木々の暗闇から、何が向かってくる。
「あんた達、何？どうやってこの森に入ってきたのよ」
　長い金髪をたなびかせ、片手に闇を集めて警戒する少女。その眼光は鋭く、予断を許さないと言わんばかりである。
　そんな彼女に対し、剣士が前に出て軽い会釈と共に事情を話し始める。
「失礼し仕る。我々は幾ばくかこの地を離れ、舞い戻った次第。粗相、厄介あるならば謝る」
「いや、そういうこと聞いてるわけじゃないんだけど……まぁいいわ」
　肩を竦めながら、掌に集めていた闇を霧散させる。一定の、警戒は解いていいぐらい

の信用はとれたと見て、他の面々を警戒をほどく。
　とは言え、本来であれば彼らは余程のものでない限り警戒をする必要すらないのではあるが。
「それで？あんた達何者？」
「先程も申し上げたが、我々は故あって外より戻った者。所以は失礼ながらお伝えできない事ゆえ、御免」
　懐疑そうに目を向ける少女に、剣士はただ瞑目して謝意を伝える。雰囲気と肩を竦めるような仕草で先を促す少女。
「私は、この一行を率いる者。名をば、『青龍寺（せいりゅうじ）　刻縁（こくえん）』と申す。役名等含めるともっと長いのだが……」
「そういうのいいから。で、そっちの人達は？」
　剣士――刻縁の後ろに控える者達へと視線を送る少女。
　視線を送られた者達の内、眼鏡をかけた柔和そうな識者が前へと出る。
「では僭越ながら私から。私は『想河（あいかわ）　水京（みなきょ）』と申します。古きの宋の出ですが、今は大和の地に帰依しております」
　綺麗な一礼をして口上を述べる識者――水京。育ちの良さや気品すら見受けられるその姿は全てが自然に見えるほどであった。

水京が下がり、次の番かと花魁が残りの二人を見てから口を開く。
「私は『狂骨』よ。時折昔の名残で狂骨太夫だなんて呼ばれることもあるけれど、狂骨と呼んで頂戴な」
柔らかな微笑みを浮かべて、親しみを込めた言葉遣いで語りかける花魁――狂骨。
少女の目線が沈黙を貫く残りの二人へと向けられる。
「……拙は、『夜九　陣兵衛』と言う」
「……我名、『崇羅』。……姓、不語」
二人してぶっきらぼうな回答であった為に、余計に懐疑的な目を向ける少女だったが、呆れたような水京と狂骨の反応に、いつものことなのだなと解釈する。
そんな少女に、刻縁は話しかける。
「不躾だが、貴殿の名は？」
「ん？あー、ごめん忘れてた。私は『ルーミア』だ。よろしく、刻縁さん？」
お互いに名乗りを終え、知己を得る。それから、ルーミアと名乗った少女の案内の元、魔法の森を出るための道を行く。
しばらくは荒道ではあったが、次第に木々の隙間が多くなっていく。もうしばらくもすれば拓けた道へと出れるだろう。
「そういや、貴方達ってなんで外から帰ってきたのさ？」

「む?-そうさな……強いて言うなれば――――故郷が、懐かしくなったから、であろうな」

ルーミアの何の気はない問いかけに、刻縁はただ、透き通るような、懐かしむような笑みを浮かべて答える。

それに対しルーミアは、なにかあったのだろうと心の内にて秘めて思うのであった。

とは言え、刻縁らは至極単純に故郷に帰りたいと思った――のもあるが、目的はまた別にある。しかしそれを語るのはまた後日。

肆・人里にて

ルーミアと名乗った少女に連れられ、一向は森を抜ける。刻はすでに明け頃、あたりはほのかに明るみを差してきていた。

他愛のない話をする内に、いつの間にか外に出ていたということに、ほう、と少しばかりの嘆息をして陽を眺める刻縁。

「んじゃ、案内はここまで。人里には私らは近づけないからね」

「うむ、恩に着る。息災でな、ルーミア」

手をひらひらと振り、森へと返り入っていくルーミア。それを見送った一向は、人里へと歩を向ける。

朝焼けの、穏やかな風が吹きし野道を行く彼ら。中でも、懐かしさを禁じ得ない刻縁のその表情は、その望郷の念の大きさが窺えるほどに清々しく表れていた。

・　・

・

雑多に人々が行き交う人里へと入り、その格好でさえ疑われぬほどに自然態で、各々人ごみへと紛れていく。

「いらっしゃい、いらっしゃい！新鮮な野菜が入ってるよー！」

「お米はいらんかねー？おいしいお米はいらんかねー？」

商人達の喧騒、井戸端の母親達の会話、子供達の笑い声。それが響きあう人里は活気に満ちていた。

そんな中で刻縁と、その側にて控えていた水京は、宿ないしは拠点を探すため、辺りを見回していたところ。ふととある店が目に入る。

「ふぅむ……水京」

「えぇ、承知しておりますよ。掘り出し物があるといいですねぇ」

刻縁が指を座した店に意識を向けて、なおその絶えることのない柔和な笑顔を浮かべる水京。二人は、その気にかかった店へと入っていく。

『霧雨店』と書かれた、古道具を多く扱うのであろう、小洒落た店へと――――。

「いらっしゃいませ、ようこそ『霧雨店』へ」
「あぁ、邪魔をする」
　眼鏡を掛けた店番からの声に、軽く目礼と共に言葉を返す。店内には、古惚けた、しかして値打ちのあるであろう壺や、長い年月を経ても、なお色褪せることなく鮮やかな絵が置かれていた。
　そうして店内を物色していると、店の奥より声がする。
「おーい、”霖之助”ぇー！ちょっと手伝ってくれー！」
「あ、はーい、今行きまーすっ。すみません、少し離れますね。ご用でしたら呼んで下さい」
　そう言って、店の奥へとかけていく番頭。多少毒気を抜かれたものの、肩を竦めてゆっくりと店内の品々を見ていく。
　様々な骨董品や古道具が置かれ、中には外の世界から流れついたであろう、大きな振り子時計や、ソファー等といったものまであった。
　しばらく見ていると、奥から先ほどの眼鏡の番頭と、もう一人の青年がやってくる。
「いやー、いてくれて助かったわ霖之助。親父がまたどでかいもん持ってきててなぁ—

――っと、接客中だったのか」
まだ少年らしさを残す青年が、刻縁達を見つけるや否や、二人に向かって頭を下げる。
「すまねぇお二人さん。ちょいと大仕事があったんだ、申し訳ねぇ」
「何、構わんよ。貴殿はここの主人かね？」
むしろ有意義だった、と言わんばかりの笑みを浮かべていた刻縁の問いに、青年は苦笑いをしながらかぶりを振る。
「いんや、ここの主人はうちの親父さ。あー、悪い悪い。うちは　霧雨　ってんだ。んでこっちは――」
「ここで学ばさせてもらっています、『森近　霖之助』といいます」
青年の紹介を経て、軽くお辞儀をする霖之助。真面目そうで、よく頭が働くであらう霖之助の、その姿を見ながら刻縁は思う。
（しっかりしたものだ……視たところ、半妖か？物好きなものだ。……しかしまぁ、商才は微妙なところかね）
先の番頭としての姿を見ていた刻縁は、霖之助の本質を見抜き、薄らと苦笑する。
その様子を見て首を傾げた霖之助と、霧雨と名乗った青年。そんな折りに、草履の摩る音が店頭より聞こえ、彼らが振り向く。
「もうっ！忘れ物していますよ！」

「ああっといけねっ。助かったぜ」
　青年の想い人であろう女性が、包みを持って息を切らしていた。体が弱いのか、息を大きく切らしており、青年がそれを支えていた。
「無理すんなよ。これぐらい他のモンに任しときゃいいもんによ」
「わ、私が、会いに行きたかったからでは、ダメ、ですか？」
　息切れもあるだろう、紅潮した顔で言われた青年は、目を見開くや否や朱が入った顔を背けて、照れを隠す。
　頬をかく青年に微笑むという、なんともはや若い光景に、刻縁と水京もまた笑みを浮かべる。
「ふっ、まるで里に居たときの水京夫妻のようだな」
「おや、そうですかな？それは困りましたねぇ」
　そんな二人の会話が聞こえたか、はたまた霖之助の向ける微妙な視線に気がついたか、慌てて二人が離れ、青年は咳払いをして気を取り直す。
「そ、それで、あんたらは何かお求めかい？」
「ん？そうだな……――――では、これを貰おう」
　そう言って手に取ったのは、艶やかな、しかし相当の月日を経たであろう、丁度良い大きさの盃であった。

鬼の大盃ほどではないが、月夜酒には丁度良い大きさであり、刻縁はこれを、入ったときより目につけていた。
「ん？それでいいのかい？だったら――っと、これだけになるな」
番頭台より算盤を引き出して弾き、値段を見せる。それを見て懐から丁度その値の銭を手渡す。
「毎度あり。そっちの御仁は？」
「そうですねぇ、では此方の簪をば一つ」
水京と青年が話し合う中、刻縁は霖之助に近付き、持っていたいくつかの古道具を見せる。
「これの買い取りは出来るか？」
「えぇ、出来ますよ。少々お待ちを――――叔父殿、買い取りです」
店の奥に声をかける霖之助。すると、奥から初老を迎えたであろう白髪が入った男性が現れる。
そして、刻縁の出した筆や飾り物を丁寧に持って見ていく。それから、算盤を出して一つ一つ値段を決めていく。
その様子を傍目に、刻縁は霖之助に問いかける。
「ついでになるが、この辺りで、空き家か宿はないだろうか」

「そうですね……里の外れですが、少し大きめの空き家があったはずです。案内しましょうか？」
「それは助かる、是非願いたく」
　そんな会話の後に、買い物を終えた水京と、買い取り金を受け取った刻縁は、霖之助の案内の元霧雨店を去り、里の外れへと向かうのであった。

伍・方針

霖之助に連れられて里の外側にある空き家へと向かう二人。さしたる会話も無かったが、特段気持ちが不味い沈黙ではなかった。

しばらくして、件の空き家に辿り着き、しばし見分する。その後に霖之助は去り、残るは刻縁と水京の二人のみとなる。

空き家は寂れており、老朽がしばしば見られるものの、拠点として一時的に住むならば問題のない程度であった。

そこからは、刻縁の肩に留まる一羽の鴉に何事かを伝え、空へと放つ。それから暫く、鴉が帰ってくると、刻縁と共に来た侍従らが遠くより歩み来る。

「あら旦那様、もう仮住まいが決まったのね」

「……些か荒んでおりますが、多少の手入れで問題はありますまい」

空き家を見て侍従らはそう語る。実際、いくつかの荒れは見えるものの、人里にあった家々よりかは一回り大きく、それこそ彼らが住むには充分であった。

寂れた空き家に、崇羅が糸を紡いで補強し、刻縁と水京が最も酷い部分を、その能力によって再生させていく。それまでガタが来ていた襤褸屋は、人が住めるまでに様変わ

りしていった。
「現状、これで良かろう」
「ですねぇ。一先ずは、ですが」
そう言いながら建て直した空き家に入っていく。居間に皆が集い、水京が霧雨店にて買い漁った座布団を敷き、それらに座っていく。
一息吐き、刻縁が口火を切る。
「さて、ではここからの話だ」
「「はっ」」
先程までののんびりとした空気を改め、談話から会議へと切り替える。それはさながら合戦前の古強者の如き様であった。
「まず、前提から改めていく。水京」
「はい、さしあって我々の第一目標は、『幻想郷への帰郷』でした。これは現在、無事達成しています」
水京がとうとうと語る内容に、皆一様に頷く。それを見回して、全員が確認したと解する。
「では次に今後ですが、一つは『八雲紫、ないしは博麗の巫女等主要陣に見つからぬこと』です。これは、我々が発見されては、最終目標の達成難易度が飛躍的に跳ね上がること

に起因しています」

沈黙。だがしかし、この幻想郷における主要人物に見つかってはいけないということを理解した上での沈黙。即ち、話の続きを催促させるための沈黙である。

「もう一つは『我々の屋敷をどこに配置するか』ですね。今は当代が天と地の狭間に隠して頂いてはおりますが、早急に決めなければならないことの一つです」

「天と地の狭間……って、あの不思議世界のことかしら?」

今まで黙っていたものから、一人質疑を行う狂骨太夫。それに対し水京は鷹揚に頷く。

「ええ、そうですよ。四神に仕える補佐官に与えられる、一種の領地的意味合いを持つあの空間です。とは言え、ここは幻想郷。何が起こるか判りませんし、早々に立地を決めておくのがよろしいでしょう」

水京がそう答えると、納得したのか太夫は下がる。それを見た水京は、話を元に戻して続けていく。

「諸問題は数多く残っていますが、我々の最終目標を忘れてはいけません。何の為に外の世界に居たのか、何の為に外の世界でこの幻想郷の未来を見たのか。それを忘れることになるのですから」

瞑目して語る水京。それに連れて黙して自身らの動機を思い出す一同。

「我々の最終目標を再確認しましょう。忘れてはいけないのです。――――――『幻想郷永劫生化』つまるところ、来る未来の者達を不老化するのです」

「……さて当代。実際『永劫生化』、『住人達の不老化』などと仰られる覚悟を疑うわけではないのですが、本当にそうなさるおつもりで？」

会議が終わり、水京と刻縁のみが居間に残る。他の者達は皆自室だと割り振った部屋へと戻っていく。

狂骨が会議前に淹れ、まだ残っていた茶を飲み、一息吐いた刻縁は口を開く。

「――――なわけがなかろう。その様なことをすれば幻想郷が崩壊してしまうわ」

「ですよねぇ。とは言え、皆そこは理解できるところなのですが」

同じく茶を啜り、朗らかに宣う水京。旧来の友のように会話する彼らは、端からみれ

ば阿吽の呼吸であっただろう。
「では、如何様になさるおつもりなのです？」
「あぁ、それはだな――――――」
刻縁は水京にのみ、己の行き着く本来の目的を語っていく。それを聞いた水京は、驚いたように自身の細目を見開き、やがて納得したかのように頷く。
まだ夜は訪れたばかりだが、明けるのは時間の問題だろう。なぜならば、彼らは古くより共に有り、古くより共に歩み、そして侍従らの中でも、水京こそが最も古株にして友たる者であるから。
夜は更けていく。しかし、それと共に明けていく。これより訪れる幻想郷の新たなる夜明け。何が起こるかは神さえも知らず――――――

〈欧州　某所〉

「――御当主様、遂に発見いたしました」

その身の内に溢れる恐怖を、無感情を取り繕って隠す侍女。目の前の玉座に座る人物は、それにニヤリと口元を吊り上げる。

深紅の空間には、玉座の前に跪く侍女と同じ格好をした侍女衆が、これまた彼女と同じくして無感情を装っていた。

「ククク……遂に見つけたか。でかしたぞ」

「……ありがたき幸せ」

震えそうになる声を必死に隠し、その侍女は至って平淡に幸悦の言葉を伝える。

彼女らの首には首輪が付けられており、それは決して逆らえぬ枷。玉座に座る男はただ、その口元の犬歯を見せて獰猛に笑む。

「光栄ついでに、今宵は余の共をせよ。良いな?」

「!?……は、はっ」

絶望に打ちひしかれた顔に歪め、侍女は顔を伏せる。

男は立ち上がり、解散を命じると、自室に向かいながらなお笑みを浮かべる。

空には赤い月。照らされるは深紅の邸宅。深夜0時の鐘音が鳴り、躍動の時を示す。

陸・吸血鬼異変　Ａｃｔ１

拠点を取ってよりしばらく、時にして二つ三つ程季節が巡った後の、麗らかなる季の夜。

刻縁らは人里と関わり合いつつも、彼らは幻想郷をあまねく網羅していた。それは地理を、草木を、そこに住まうあまねく知るということ。

更に季節を巡り、三つ。借り受けていた家を、以前よりも綺麗して返し、彼らは人里を後にする。

「先見より至るに、この地が宜しいかと」

「……なかなか賭けに等しいな。だが、気に入った」

水京が探し留めた地を見るなり、刻縁はそう告げる。立地は、妖怪の山と畏れられる大山と、彼の警戒すべきたる博麗神社との中間。

細い笑みを浮かべながら、刻縁は自身の領域たる邸宅をその場に召喚する。そこに隠蔽、不可視、自然透過、不接触化などという術式を重ね合わせ、複雑かつ高度な召喚陣を形成する。

驚くべきは、これを一人で、なおかつ片手間に行う点であろう。”召喚したものを隠

す”のではなく、”召喚を行っていることさえも感知されない”ようにしているのだから。

はたして、刻縁の屋敷――――”龍幻楼”はここに、誰にも知れることなく呼び出され、何人にも判られることのない泡沫の屋敷として顕界した。

「使用人一同、皆余すことなく参内してございます。我らが当主当代にして主君――――

『青龍寺　辰神身右臣将（たつみだいうじんしょう）　刻縁』様」

屋敷の大広間、畳が敷かれさも大将軍との謁見が如き空気が流れる。

其れは大神に非ず、なれども”神”為り。其れは座して世を視る者である。神は人を救わず、為れども神は人を視、人を護らん。

其れを体現するかの如き武はただ、静かに座するのみ。

それより十と少し。花咲く季が巡り巡りて蝉が鳴く頃。相当に濃き瘴気が、静かなる幻想郷に満ちる。

大広間に、一堂集う。

――笑みを絶やさず、為れども静かに気を巡らす水京。

――瞑目し、下知を下されればすぐにでも跳ばんとする夜九。

――隠密として気配を断ち、しかしてそこに居る祟羅。

――当主の参内を待ち、使用人一同と共に黙する狂骨太夫。

入り口の襖が開く。集った者達は皆伏してその頭を下げる。開けられた中央を通るは、蒼き和装に身を包んだ刻縁。

上座の段に座り、睥睨する。

「――――面を上げよ」

皆が静かに頭を上げる。

しかし空気は、一層に引き締まる。

「かねてより予見せし吸血鬼伯、スカーレット卿の侵略が来た。故、議を始める。水京」

「はっ！それではこれより、簒奪者スカーレット卿の侵攻に対する我らの動きを開示致します」

淡々と、そして朗々と告げられる水京の策謀。

曰く――簒奪者スカーレット伯の討伐は既に行動中の”八雲　紫”、及び”博麗　■■”に一任す。

当方らは両名の討伐行動中にて陰ながらに人里、及び妖怪の山の守護を行う。

遵守条件は人里、及び妖怪の山の守護貫徹。ないしは逃げた敵対者ないしは”外の世界の技術”の抹消。

「――以上を以て幻想郷防衛計画の概要と成します。齟齬はございませんね？当代」

「無い。各々、奮励努力せよ」

「「「はっ!!」」」

覇気纏いし鬨の声が響く。座りながらに一礼して、各々の動きへと向かっていく。

皆が去り、腹心たる四人と己のみが残る。

「崇羅」

「……居（ここに）」

己の忍を呼び、忍は刻縁の前にて座して応じる。

「館を視よ。敵を逃すな」

「御意」

残像を残して去る。

直後、刻縁は次々に指示を下していく。
「水京、お前は――――――」

所変わり館前。並び立つ二人の強者。
眼前には無数の妖魔怪物共。涎を垂らし、強者とは言えたった二人の獲物に、その獰猛性を見せつける。
「最悪な夜ね。本当、最悪だわ。……そうは思わない？」
「あぁ。……敵は多いな、紫」
澱んだ瘴気が流れる。

呆れ、軽蔑にも似た溜息と共に、傍らに佇む巫女を流し見る。
傷痕の多い巫女はただ、無愛想な感じで言葉を返す。
「……いや、大したことはないか」
そう言って、巫女は紫に顔を向ける。
澄ました顔で紫は黙する。
「今夜は、私とお前で二人掛かりだからな」
「――ええ、まったくその通りね」
薄く微笑み、幻想郷の賢者は顔を正面にて蠢く有象無象へと向ける。
「訂正しましょう。――今夜はなかなかいい夜になりそうだわ」
妖魔怪物郎等こと有象無象。牙を向き、おぞましいほどの殺気を向ける。
それをさも涼しく受け流す、真に強者なる二人。今、戦闘の幕が開く。

漆・吸血鬼異変　Ａｃｔ．２

「さて……」

ため息一つ。静かに佇む巫女の隣、妖怪の賢者たる紫は、周囲に溢れる下卑て不愉快な”雑草の群れ”を睥睨する。

「伯爵様は余興がお望みのようですけれど――」

呆れた顔で館を見る。それはなんともつまらなそうで、なんとも下らないと言わんばかりに眉を下げていた。

だが、それもまた、つかの間のことである。

「――付き合う義理はありませんわね」

静かなる殺気が周囲に満ち充ちる。その顔には先程の如く、穏やかな笑みが浮かぶ。

巫女は依然平然としており、そよ風のように流しているが、周囲の雑兵たる妖怪達にはそういうわけにもいかない。

皆全て恐れを無し、辺りへ三々五々に逃げていく。脇目も振らず、ただ其処にいる強大なまでの存在から逃げきらんとする為に。

「あらあら、幻想郷の妖怪も惰弱になったものね。だからこそ、余所者にいいように使わ

れるのでしょうけど」

半ば侮蔑、半ば期待外れ、そして僅かばかりの憐憫を思わせる言葉を吐き、二人はがらんどうとなった門前に佇んでいた――――。

・　・　・

妖怪達は逃げていた。――勝てるわけがない、あんなのと戦えるわけもない。スカーレット伯爵よりもなお強烈な存在感を放った紫に、心の底から恐怖していた。

だからだろう。逃げることに手一杯で、目の前の存在に気づくこともなかったのは。

「――大盾構え!!踏ん張りなさい!!」

「「「はっ!!」」」

鈍痛がした。まるで壁にぶつかったかのような痛み。この痛みで半ば我に返った妖怪の一体は、周囲を改めて見る。

狂乱状態となって、反乱した川のように襲いかかる仲間達を、言葉通り壁のようなものが逃すまいと進路上に陣取っていた。

「弓射隊、構え!ここから逃すことは恥と思うのです!!――放てッ!」

弧を描くように取り囲まれていた自分達の頭上から、幾千もの矢が降り注ぐ。なまじ密集していたが為に避けることすらできず、その妖怪は脳天に矢を受けて倒れ伏す。

最後に見たのは、白く翻る、智将が矢を放った姿であった。

・

妖怪達は逃げていた。否、逃げるしかなかった。スカーレット伯爵なんてどうでもいい。〝アレ〟から逃れるにはとにかくここから離れることだけ。

走る、走る。深い、深い森の中。自身の近くにはまだ仲間がいる。だが、確実に数が

減っている。
視界を埋め尽くすほどにいた仲間達が、今では視界がある程度開けてしまうまでに減っていた。
――おかしい。この妖怪はそう思った。だが、その次は無かった。なぜならば、その首は気付かぬ間に切り落とされ、地を転がっていたから。
「……良。……次」
ボソリと聞こえた死神の呟き。妖怪は、最後まで自身が何を相手取ったのか、何に殺されたのか、知ることなくその意識を沈めるのであった。
ただ、細く煌めく、月光に反射した糸筋を脳裏に刻み付けて。

・

屍が転がっていた。生き残った者は居らず、また、立ち上がった者すらも居なかった。
――ただ一人、屍の群れの上に佇む剣士を除いて。
「……夜九様、此方は粗方片付き申し上げます」
「……あい、判った。なれば、此の屍を燃やし候え。野に置けば、病の元とも成る」
「御意」

軽鎧を着けた若武者の一人が去っていく。剣士はただ静かに歩みを進め――――一閃。

「ごはァ……ッ!?」

「戯け、己が部下さえ判らざるわけも無し。死して出直せ」

血を払い、鞘に納める。斬られた妖怪は、その倒れ伏す際に、その胴体を二分にし、破裂した水の如く血を撒き散らして転がる。

屍が転がる。歩むはただ独り、剣の道を選び、修羅が如き修練にて極致に至った剣客。

「屍を焼却せよ。生者の是否は問わん」

「「了解」」

剣客の目前にある森から、いくつもの火柱が放たれる。屍を燃やし、この幻想郷に牙を剥かんとした不届き者達が一掃される。

その炎は、深海をも思わせる夜を照らしながらも、決して人にみられることのない”狐火”。

屍が燃える。幻想郷に仇なす者、許すまじ。そう言わんばかりに。

・

混沌の世界が広がっていた。確かに目の前で”コイツ”は死んでいった。そのはずなのに、なぜ起き上がり、ましてや自分に牙を剥くのか。

困惑したままその妖怪は喉元を食いちぎられ、哀れ絶命する。しかしそれのみに収まらず、その屍もまた起き上がり、また仲間に喰らいつく。

「うぅん……”びぃきゅうえいが”、なんてシロモノにあった、”ゾンビ戦法”とか言うの？凄くえげつないけれど、私には合わないわねぇ……」

そんな混沌とした陣地の奥、巨大なガイコツの頭上で、頬の手の上に置き、ため息をつく遊女。

空いた片手には大きめの扇が下げられ、背には薙刀が背負われている。

「姉さんは容赦無さすぎですよぅ。そんなんじゃ、奴さんの立つ瀬すら無いですよー」

「そうかしらねぇ……」

眼下には混沌とした世界が平がるにも関わらず、ほのぼのとした会話が成される。

そんな中、ある一匹の妖怪が放った妖力弾が、丁度話していた、遊女を姉さんと慕う女性にかする。

「……いい度胸ね？」

妖力弾は難なく避けていたが、その行動が頭にきたのか、凄惨な笑みを浮かべる遊女。

慌てて女性がなだめるも、時すでに遅し。

「”皇骸(おうがい)？ヤって」

本能から刺激されるかのような、おぞましい雄叫びと共に動きだす巨大ガイコツ――大妖怪たる”餓者髑髏(がしゃどくろ)”。

その巨体に見合わぬ俊敏な動きで、まずは女性を狙った妖怪を。次にその周辺にいた悲運なる妖怪や、同じくして、自らの主たる者達を狙わんとした者達に鉄槌を下していく。

「ね、姉さぁぁぁんっ!!」

「フフフフ……私の妹を狙うなんて……許さないわぁ？」

遊女の逆鱗に触れた憐れな妖怪達は、次から次へと骸に変わり、死して尚赦されぬ地獄を味わうこととなっていく。

・

吸血鬼達は焦っていた。何人かは館に残ってはいるものの、自らが屈服させ、集めに集めた妖怪共が戦わずして逃げる始末。

――このままではマズイ。そう思った彼らは至急妖怪達を集め直そうと飛び立っていた。だが――――

「――ほう、格式高き吸血鬼ともあろう者共らが、他者に下るか」
頭上より注がれる一声。仰ぎ見れば、紅いはずの月は青くなり、それを背にして浮かぶ一人の和装の男。
勝てない。そう思わせるには充分な存在感であった。スカーレット伯爵は、それこそ言葉に出来ぬほど凄惨で、あの女共も強者であったろう。
だが、この男はそれらよりも格が違う。そこにいるだけで畏怖せざるを得ず、プライドの高い吸血鬼達ですら跪きかねないオーラ。
「さて……まぁ、答えんとも善い。我が故郷を侵さんとした不届き者故、な？」
鍔に指を付ける。――来るッ！。そう思った吸血鬼達は思い思いの構えを取る。しかし、
「遅い」
背後から聞こえる声、次いで刀を仕舞う金属音。鳴った、と思えば視界は縦にズレていき、そのまま体が焼ける感覚と共に墜ちていく。
何故、何故だ。何故何故なぜナゼナゼ――――。疑問を浮かべながら、吸血鬼達は無残にも散っていく。
「ふむん……？あの紫をしても苦した手合であったと聞くものであるから、もう少しやると思ったのだが……」

吸血鬼達は決して弱くはなかった。それこそ、スカーレット伯が身辺警護を任せる程には。

だがそれさえも通じない彼こそが――――東(あずま)の守(かみ)にして神(カミ)。龍神の長たる『青龍』の名を受け賜ることを許された、八百万に属する者。

「さて……あと少しばかり露を払おうか。幕閉めにはまだ早い」

そう言って、男は翔ぶ。そこには先程まで吸血鬼だった、焼けた灰のみが落ちていた。

捌・吸血鬼異変　Ａｃｔ．３

〈紅魔館　中庭〉

戦況は佳境を迎えていた。突如として融け始める自身の眷族と、同じく突如として不死の身である己の身体へと激痛を与えてくる、目の前の人間。

「ギッ――――イヒィィィィイ”イイ”ッ!?」

己の喉元から放たれた異形な悲鳴。その身体に打ち込まれた部分から、焼けるような痛みとともに徐々に劣勢になっていく。

「バカな……バカなぁ!?」

スカーレット伯爵は混乱する頭を必死に振り絞り、自らの眼前に迫る『死』を、如何にして振り払うべきか――。

否、例え眼前に居るのが脆弱な人間であれ、最早敗北による『死』は目の前のこと。それは避けようがなく、刻一刻と足音を立てて迫ってきていた。

「ガッ――ハッ!!」

鳩尾に『太陽』が打ち込まれる。屋根からは弾き出され、宙へと放り出される。

理解できなかった、何も。

栄華、孤高、傲慢にして暴君。その一切を極めたはずの己が、たった一人の人間相手に、為す術もなく蹂躙され、そして敗北するという結末に。理解できなかった。

「ギッ――がほぁっ」

焼ける痛みと落ちた衝撃。幾本かの骨が砕け、不死身の体は限界を迎えていた。崩れ落ち、灰となり、よしんば今は耐えても次の一撃で塵と化すだろう。

「はっ、はっ、はぁ……ぁあああ”!!」

焼ける、焼ける。焼ける焼ける焼ける砕ける崩れる灼ける灼ける灼ける灼ける――――死ぬ。

認められなかった、認めるなど出来るはずもなかった。こんなところで、あんな人間の小娘如きに負けるなど。

月光に影が映る。まもなく、その『太陽』が振り落とされるだろう。最早、なりふりなど構っていられなかった。

「あ、あ、あぁあああ”!」

懐から、一丁の拳銃を取り出し、構える。恐怖心のままに引き金を引き、銃弾を放つ。

だが――その抵抗も虚しく、銃弾はその人間の手の中に握られ、当たることなく落ちていく。

「あ――――」

拳が振り落とされ、その心臓に渾身の一撃が放たれる。

最後の最後に言おうとした言葉さえ紡ぐことさえ出来ず、その身体は消え去っていっていた。

――あぁ、死ぬ。死んでしまう。魂だけになっていく。

肉体が塵に変わっていくのを感じながら、スカーレット伯爵は茫然としていた。

――だが、まだだ。例え魂だけになろうとも、私は何度でもこの世界を支配しに――

「不死者も、ここまで来れば滑稽なものだ」

憐れむような、そして愚かな羽虫の戯れを見ているかのような声が聞こえる。気付けば周囲は見慣れた館の中庭ではなく、真っ白な地平線の上であった。

――何者だ!?

「何者、か。陳腐なことしか問えぬとは、な」

蒼がはためく。それは、圧倒的なまでの覇者の風格。長くを生きた己よりも、さらに永き時を重ねた者の存在感。そして、それは言うなれば――”神”の如き。

「我が故郷を穢す不届者よ。貴様は輪廻に乗せることはおろか、ただ消すにも不足である」

腰の剣が抜かれる。青く、蒼く。澄んだ蒼の刀身が抜かれ、先程の人間よりも遥かに、それこそ格の違う本当の『死』を纏っていた。

少なくともそれは、スカーレット伯爵にはそう見えた。

「故に、ただ往ね」

――舐めるな、下等種め!!

平時の、それこそ敗北を味わう前の伯爵ならば、このやうに勝負を焦ることなどなかっただろう。

しかし、今は敗北を。それもただの人間の小娘に負け、さらには目前に『死』が具現化して迫っている。

「愚かな」

ただ、一言。視界が割れる。魂が、砕ける。声すらも出ず、真っ白になっていく。

思考が――消えて――――飛んで――――し――ぬ――――――。

「たかだか１００年そこらの若造が。頭に乗るからそうなるのだ、戯け」

静かに納刀する青年。龍の髭のような襟足がはためき、粉々に砕け散っていく伯爵の魂に背を向ける。

来た道を戻るかのように歩み続け、次第に暗く静かな、石畳の並木道へと変わっていく。

「終わったかね、刻縁殿」

「あぁ、これで”片付け”た。助力感謝する――妖忌殿」

初老を迎えた半人半霊の剣士に礼を言う青年――刻縁。

それに頷くと、妖忌と呼ばれた老剣士は、刻縁と並び歩く。

「今回の件は幽ヶ子様にも伝えてある、が……」

「無論、紫には伝えん。私を知らすにはまだ尚早だ」

「ふむ、そうか……」

枯れた桜の並木道、その中央を通る二人の剣士。簡単なすり合わせを終え、他愛のない話をしていく。

「時に刻縁殿、またいずれ暇があれば」
「構わぬよ。私としても、よき修練になる」
「して、また宵の酒ですかな」
「ふっ、違いない」
仲良く談笑し、奥に見える屋敷へと歩いていく。
それは、つい近頃に出会った者達とは思えず、まるで旧年来の仲であるかのようであった。

求・スペルカードルール採用

静けさを持つ、枯れ桜の並木道。その外れにて、二人の剣士が盃を交わしていた。
「そう言えば、お主の言った通りに紫が動いたらしいな」
「で、あろうな。〝アレ〟が切欠とは言え、些か実力主義に頼り過ぎたのだろうよ」
盃をグイッと煽り、そう締め括る刻縁。
今現在居る冥界より見て下界、地上では八雲紫よりの通達によって、今までの実力至上から『スペルカード』という代物を使った遊戯対決へと変わっていく、とのことだった。
「思ったよりも早かったの。……儂も、もうじきかの」
「時が経つのは早いとよく言う。これもまた摂理であろうよ……寂しくはあるがな」
物憂げな顔をする二人は、並木道の奥の巨大な枯れ桜を眺め見る。そうして、出会った頃を想い出していた。

――吸血鬼異変より数ヶ月遡り――

「貴様、何者か。ここが冥界が主、西行寺幽ヶ子様の邸宅の知っての狼藉か」

「無論、しかして狼藉に非ず。非礼は侘びるがしばし滞在させて頂きたい」

向かい合う二人の剣豪。片や、半人半霊の庭師にして冥界の現番人。片や、四方を司る神獣の化身にして高天原の末席に並ぶ者。

柄に手を置く二人の間には、目に見えないものの互いの発する気がぶつかり合い、せめぎあっている。

「……我が名は『青龍寺　辰神身右臣将　刻縁』。故有って此に来る去る者を斬らねばならん」

「西行寺家が庭師『魂魄　妖忌』。幽ヶ子様の許可なくその様な事は許可できん」

交渉決裂と見たか、刀の持ち手に手を添え、すぐにでも抜剣できる体勢となる。

それは二人共に自然体であり、対峙している二人のみにしか感じられぬ殺気の衝突が行われていた。

たった数秒でさえも、数分以上に感じられる程濃縮された意識の中、二人の意識がほ

んの僅かにぶれた。
その瞬間、互いに抜剣し――――――

「――あの時は、互いに頑固者であったなぁ」
「いや全く、返す言葉もないな」
高笑いして談笑する。そうして二人だけの酒盛りは過ぎていき、思い出話に花を咲かしていく。
だが、時の流れは残酷で、次第にお開きの流れとなっていく。
「――さて」
「む、逝くのか」
「うむ、逝かねば」
言葉数の少ない会話。だが、剣を交えた二人の間にはそれだけで充分であり、それ以上を語る必要はなかった。
「では」

「うむ」

「いずれ、また会おう」

蒼き剣士はなお大桜を見上げ、半霊を纏う剣翁は遠くへと歩みを進めていく。

背を向け、別離する証左とした。そうして去って逝く盟友の背に、盃を傾けながら別れを告げる。

「さらば――柳生の血を持つ半霊の剣士よ」

それよりその場に残るは、空になったものと、そのまま手の着けられることの無くなった、飲みかけの盃のみであった。

・

・

・

～未だスペルカードが導入される以前の話～

――とある日――

「――何者だ」

仮住まいを決めた日より幾日、刻縁が近場の森を散策しているときであった。

背後に不可思議な気配を感じ、手元の刀へと手を置く。感じたのは、霊と魔法の気配。

「おいおい、そうカッカしないでおくれよ。あたしゃ何もするつもりはないぜ？」

そう言って姿を現したのは下半身が幽体化した、見た目からも判る『魔女』であった。

「あたしは人呼んで『魅魔』ってもんさ。なーんか知らない気配があったもんで見に来たんだが……あんただね？」

「……で、あろうな」

ある程度は警戒を解くも、その挙動に細心の注意を払う刻縁。その姿を見た魅魔は、なかなかに絡み辛い相手と判断した。

それでも飄々とした態度は変わらず、少しでも刻縁の情報を得ようと会話を続ける。

「ところであんたは何者だい？見たところ、ここいらの者じゃなさそうだけど」

「……最近戻って来た者だ」

淡々と短く答え、与える情報を少なくする。とは言え、魅魔もそれで誤魔化されるほどバカではなく、そこから得られたものを、脳内で整理していく。

しかしそれを悟られたか、目の前の刻縁に半目で睨まれ、慌てて取り繕って誤魔化す。

「……まぁいい、あまり詮索はするなよ」

「わかってるさ、あたしもそこまで野暮じゃないよ」
と返すと、刻縁はそのまま森の奥へと消えていく。
残された魅魔は、今さら出てきた冷や汗を拭いながら、近くの木にもたれこむ。
「はぁ、やれやれ……久々におっかないもんと出会っちまったよ。ありゃぁ……滅多に見なくなったガチもんの神サマじゃないかい……」
げんなりした様子で体を預け、ぐったりとする魅魔。
そんな魅魔に、空から降りてくる影が一つ。
「――魅魔様――！見つけましたよ！……って、大丈夫ですか？」
「ん――、あぁ、魔理沙かい。ちっとヤバいのと出会して、ね」
ため息を吐きながら、自分の弟子たる魔理沙を見る。
きょとんとアホ面を晒す弟子に頭が痛くなりそうだったが、それよりも今出会った相手に敵対しないことが優勢と考えた。
「いいかい魔理沙、よく覚えときな。――――蒼い和装の剣士にだけはケンカ売るんじゃないよ」
「えっ？何のことですか？」
突然何を言い出すのかと魔理沙は疑問に思うが、魅魔は有無を言わさず、脅すように言い聞かせる。

「いいね？返事は？」
「は、はいっ！」
これで一応は大丈夫かと、更に溜めていた息を吐く魅魔。
だが、これから数年後には、この不肖の弟子が彼と相対することになろうとは、今の彼女には夢にも思わぬことであった。

スペカルール導入後編（＝本編）

拾・紅霧異変にて

吸血鬼異変より幾星霜。八雲紫より幻想郷中に『スペルカードルール』を導入するとの告知が広められた。

これにより、力によって優劣をつける時代は終わり、『スペルカード』と『弾幕』による遊戯によって決着のつけられる時代へと変わった。

「――――さて、ついにここまで来ましたね」

「うむ、想定以上に永き刻であったわ」

若干ながら疲れきった声音と共に、服の端をはためかせて真夜中の幻想郷を望む刻縁ら。

この云十年近く彼らは、自らの土台を固めるために様々な手を行っていた。屋敷の存在を隠すのは当然の如く、人里にて違和感なく溶け込み、外の世界にて伝え聞いた主要人物は遠巻きに見るのみに留めた。

――とは言え、やむを得ず関わった者は何名かいたが。

しかしそれでも、この云十年もの間、何人にも知られることもなく、何人にも悟られ

ることなく準備を行ってきた彼らは、あとは残りの【異変】を待つのみであった。
「……来也」
崇羅の呟きと共に、太陽の沈んだ幻想郷が紅く染まる。陽の光は届かなくなり、雲はおどろおどろしく漂う真紅の夜。
「これが【紅霧異変】、か」
「紅いわねぇ……」
怪しい雰囲気の中、のんびりとした空気が流れる一同。屋敷の二階、さらにその屋根の上にて、空を眺める。
「む？あれは……」
彼方にて、湖に向かって飛ぶ一つの影――今代の博麗の巫女、『博麗　霊夢』である。
「刻限通りだな。しからば、じきこれも終わるか」
「月見酒を愉しむのが趣味だったのですが……今日は止めておきましょう」
残念そうにして屋内へと屋根伝いに戻る夜九。それに連なって次々に自室へと戻っていく面々。
「おや、当代は戻らないので？」
「今しばしは、この空を観ておきたいものでな」
「相も変わらず物好きですねぇ。お風邪を引かぬように」

最後に水京が降り、刻縁一人となる。懐より盃を取り出し、どこからともなく底より水が湧き出てくる。

その水を煽りながら、物静かで赤い紅い夜を過ごして行く――――。

…　…　…

それから無限に湧く水を飲みつつ暫く。何事もなく静かに飲みつつ、空を眺める。時折遠くより何かが崩れるような音が鳴ってはいるものの、比較的静かであった。

そうしてさらに時が経ち。夜明けも近頃と思えば、彼方より霧が晴れてゆく。

「ほう……まぁまずは、よくやったと言うべきだろうな」

満足げに頷いた刻縁は残りを飲み干すと、霞のように気配を消して戻っていく。

空は、新しい一日を告げるかの如く朝日が昇り、まるでナニカを祝福しているかの如く柔らかであった。

～所変わり～

雀が鳴き、朝を告げ、先程までの激戦の余韻すら残らぬ静かな空間。そこに手を繋いで眠る二人の吸血鬼。

そこへと喚きたてる烏の文者と、聞かれてもいないのに胸を張ってあれこれ語る魔女の子を余所に、霊夢はふと何かを感じて振り替える。

「？……気のせいかしら」

訝しげにするも、視線の先には何一つなく、ただ霧の浮き出る湖畔と、その先の鬱蒼とした森林が広がるのみであった。

肩を竦め、いい加減しつこいぐらいに喧しい二人を諌めるため、手に持つ大幣を持ち直し、呆れ半分煩さ半分で若干大股に進みつつ近づいていく。

その後、湖畔に響きわたるほど鈍い音が二つ響いたそうな――。

拾壱・春雪異変にて

しんしんと雪が降り、冬も最中と言わざるを得ない日々。特段、なんら異常でもないかのように見えるが――現在、本来ならば春の頃である。

とは言え、刻縁らの屋敷たる『龍桜楼（りおろう）』は季節に関係なく、刻縁の存在によって毎日桜が咲き続けているのだが。

しかしながら、積もるほどの雪に満開の桜とはどうにも合わず、皆様々に渋面を模していた。

そんな中、使用人らを省く幹部ら四人が、屋敷奥の本殿大広間にて一堂に召集がかけられていた。

「面を上げよ。――――これは集まる度にやらねばならんか？」

「ええ、必要なことですので」

片眉を下げて訝しげにする刻縁に、満面の笑みをもって答える水京。唸りながらも渋々納得し、咳払いをして空気を整える。

「では、此度の異変――【春雪異変】についてだが」

誰かが声をかけるまでも、ましてや目を合わせるなどということもなく、皆一斉に黙して次の言葉を待つ。
「今回、私は本丸――白玉楼へと向かわせてもらう」
「失礼、その真義をお聞きしたく」
刻縁の発言に対して、真っ先に噛みついたのは――夜九であった。
一声咎めんとした水京を制しさせ、夜九を見据える。
「此度の件、端的に言うなれば、西行寺家現当主の暴走と、八雲紫による巫女らの実力試しのようなもの。ならば私も、あれなる者らの実力を見定める――――と、いうのが建前だ」
「建前…。では、本音は」
その問いに対し、意地の悪そうな笑みを浮かべてこう返す。
「この異変に託(かこ)つけて友の孫娘に修行させてやろうと思うてな。悪いか?」
「いえ、主らしいかと」
漏れでた小さな笑みで刻縁に賛同し、引き下がる夜九。
他に異議がないことを確認するように、幹部らを見ていく。皆一様に無いことを確認し、指示を下していく。
「では、私はこれより博麗の巫女らに悟られぬようこっそりと冥界へ行く。主らは巫女

らが冥界へ向かっているのを見つけ次第即座に連絡するように密にせよ！」

「「「はっ!!」」」

そうして皆席を立ち、各々の役目へと就いていく。

刻縁は外へ出るや否や空へ翔び、空に出来た冥界へと続く孔へ向けて飛翔していく――――――――。

孔をくぐり冥界へとたどり着くと、丁度決着が着いたのか、冥界の中で最も大きな妖怪桜『西行妖』に集まっていた春の気が散っていた。

無数の階段を飛翔することですっ飛ばし、近場の桜の木に潜んで気配を消す。

それはまるで、初めからそこにいたのが当然であったがの如く、そして、木の一部であるのが当然の如く溶け込んでいった。

博麗の巫女らが去り、西行寺家の当主が意識を取り戻す。刻縁がさりげなく付近の気

配を探るも、元よりこの冥界にいる二名と雑多な霊以外の気配を感じないことを確認する。

やがて、目的の人物である少女も起き上がり、負けたことを悔やむかのように当主に謝り奮起する様子を見せていた。

「――歓談中、御免」

「ッ!!?」

潜めていた気配を戻し、二人に声を掛ける刻縁。

突如現れた刻縁に驚き、すぐさま臨戦体制を取る少女と、怪しげに睨む当主。

「一体どなたかしら?少々無粋なんじゃないかしらね?」

「耳が痛い話だ。何、用があるのは貴殿ではない。――そこの魂魄家の庭師よ」

「わ、私ですか?」

不思議そうにしながらも警戒を解かない少女。その手はいつでも抜けるよう、刀の持ち手に掛けられていた。

だが、そんな警戒態勢も、刻縁の発した言葉によって更なる驚愕へと変わる。

「我が友にしてお主の祖父、『魂魄　妖忌』殿より、お主の指南役を賜った。『青龍寺　刻縁』と言う」

「お、お師匠様から!?」

驚きの余り目を見開く二人。だがしぐさま我に帰った当主が刻縁を聞き咎める。
「…ならどうして早くに出て来てくらなかったのかしら?」
「一身上の都合、八雲のに見つからぬように行動せねばならなんだ。加えて、定住地も探さねばならなんだものでな」
肩を竦めて困ったように告げる刻縁。仏頂面であるからか、本気でそう思っているかのように捉えられる。実際、割りと本気で面倒がっていたりする。
「ふうん、そう……ならいいわ。本来なら怪しい貴方は信用ならないのだけれど……、彼の顔に免じて許可します」
「忝ない」
そう告げると、刻縁は少女へと向き直り、問いかける。
「我が友の孫よ、名を問おう」
「……魂魄、妖夢です」
「その名、確と。ではこれより、友との約定に因りて妖夢、主に我が教えられること全てを視せよう。よく学ぶが良い」
こうして、かつて神々に仕えし剣豪と、半人半霊の庭師の師弟が成立することとなった。
その後の話はまたいずれ――――。

拾弐・永夜異変にて

その日も夜が来た。いつもと変わらぬ平凡にして静寂なる夜が――それが、いつもならば。

だが、その日だけは違った。

「――動いた、か」

「ですねぇ。――懐かしいものですか？」

屋敷の渡り廊下より月を仰ぎ視て、夜が訪れると共に感じた違和感を覚る刻縁と、いつものごとくにこやかに問いかける水京。

「ふむ…――まぁ、遠い昔のことであるから、な」

静寂なままの廷内と、微かにざわめきを見せる辺りの森中。今なお、龍は月を仰ぎ見る――――。

薬師の格好をして渡り歩く一人の旅人。あちらこちらより見え沸く都を練り歩き、笠を深くにかぶって行く宛もなく進んでいく。

ふと、どこぞの屋敷にか仕えているのだろう女中が、彼の目前にてよろける。それを支えたところ、見えた足元を見るやこう言う。

「失敬、足を捻られてはおられないか?」

「え?ええ……ですが、すぐそこですし…急がねばなりませんので…」

そう言って去ろうとする女中を呼び止め、背負いし箱を大通りから外れた脇道に降ろしては座らせる。

「それはいかん。斯様に易きものであっても、無理をすれば今後に響く。よう効く薬を塗る故失礼する」

と宣うや否やテキパキと箱から軟膏に似た薬を取り出して女中の足元――的確に言えば足首辺り――にそっと塗る。

本来であれば不躾な行動だが、あまりの迅速さと的確さに呆然としたまま、なされる

がままに処置を施される。
「さて、塗った手前説いた手前無理をさせるわけにもいかず。手前がおぶって送る故、行き先を尋ねたい」
「え、えぇ。ではあちらの――――」
女中をおぶり、箱をかかえて旅人は歩きだす。些か笠が邪魔に感じるも、隠れ見える蒼髪に、変わった人だと思いを抱く。
それからしばらく進み、とある一つの屋敷の前で止まるよう伝えられる。その言葉通りに旅人は止まると、女中は瞬巡するも、賓客用としても使われる大門の方へと向かわせる。
やがて大門の前にて女中が門を叩き、出てきた者にそれまでのことを伝えると、旅人は揃って中へと招かれる。
「我が家の者を手当てした上送り届けて頂き、有難うございます、薬師殿」
「いきなりの訪問、さぞ不躾であると容赦願います。しかし随分と立派ですな。大変名を挙げた御方であると存じますが」
屋敷の主と面会し、笠を取って服して申し述べる旅人――――刻縁。そんな刻縁の世辞に気を良くした主が鼻高々に語りだす。
「大した者でありませぬよ。我が娘の為に尽くした結果がこの通り」

「大層ご息女殿を想っておられるようで善きことと存じます」
大切な娘を思う親の顔を、座ることを許され身体を起こして身で言う。
しかし、そんな貴族というには些か凡な初老な主は、ふとして眉をさげて憂いの顔を見せる。
「ですがな……娘のため、幾人かのやんごとなき方々と見合わせるも、娘は難題を出して追い払う次第。情けないやら恥ずかしいやら……」
「一介の薬師ではありまするが、その心中、さぞ苦心なさるものと思い致ります」
その後、中々に数少なく、ましてや腕の良い薬師ということで、離れにて一夜二夜ほど泊まることを許す宗を伝えられ、感謝の念を伝えて下がる。
その夜、薬の調合を終え夜風に当たる為外に出て、渡り廊下にて月を見上げる刻縁。
その最中、背後より角の先より声を掛けられる
「もし、そこの方。貴女が御父様からお聞きした薬師様ですか?」
「如何にも。斯く言う貴女様は、ここのご息女殿でございますね?」
雰囲気のみであったが、頷く気配がし、互いに顔を見せぬままに会話を続ける。
「よろしければ、旅のお話をお聞かせ下さいな」
「つまらないものでよろしければ――」
方々を旅し、練り歩き、その伝え見たことを、互いに見えぬまま夜が明けるまで語り

続ける。
　陽の光が差し掛かった頃、「では、また」と互いに別れ去っていく。角から見る彼女からは、まるで川の流れのように揺れる蒼い髪が、ひどく印象に残っていた――――。

「――それからあの人といくつか旅のお話を聞いているうちに、もうあんなつまらな過ぎる”月（アッチ）”には帰りたくなーいって思ったのよ」
「そうだったのですね」
　だらしない様で横になり、素足をバタつかせて自身の共――正確には逃げてきたのを丁度良いから拐（タ）っ（ス）てき（ケ）たのだが――をする兎こと”鈴仙”に語る。
「それで、その”蒼髪の薬師様”とは会えたのですか？」
「……くよ」
「え？」
　静かに俯き、小さく幽むような声量で主――輝夜は何事かを喋る。

上手く聞き取れずに聞き返す鈴仙に、輝夜は肩を掴んで鬼気迫ったかのように口を開く。
「全――っくよ!!ビックリよ!影も形も無かったかのようにどこを探しても居ないのよ!?会えるわけないでしょう!?」
「そ、そんな叫ばれても困りますぅ～っ」
輝夜の勢いに目を回す鈴仙。そんな折、丁度隣の部屋から永琳が入ってくる。
さらにその奥では、今回の異変で迷惑（?）をかけた妖怪や人間達が集まって宴会をしていた。
「またこんなところに居たんですか姫様。それに、その薬師を探したのは姫様ではなく私達ですよ」
「だぁってぇ……」
鈴仙の肩から力を抜かして、溶けたように畳の上に潰れる輝夜。
そんな主の姿を見て、ため息を吐きながら永琳は続けていく。
「ですが、そんなな薬師が本当に居るのだとすれば、私としても一度会ってみたかったものですね」
「というより姫様、その御方のこと気になってるんですか?」
そんな何気ない鈴仙の問いに、永琳は固まり、輝夜はしばらく黙考して、こう言う。

「……あっ、そうかもしんない」
その発言に、永遠亭の者達は驚き、頭を悩ませることになるのだが、それからかなりの月日が経ってからまた頭を項垂らせることとなるのだった。
――なお、当の本人は、
「ふぇっくしゅんっ」
「おや、当代が風邪とは珍しいですねぇ」
未来にて矢面に立たされることなぞ全くもって考えていなかったのであった。

閑話・壱　庭師の稽古

風を切る音だけが響く。次いで、砂利を踏む音がする。また風を切り、砂利を踏み、そして風を切る。

遮二無二木刀を振る妖夢のそばで、縁側に座りその姿を見つめる。筋は良く、力みすぎてもいない。しかし何かが足りないとは思う。

「どうかしら、うちの妖夢は」

背後からの声。近くにいくつかの亡霊を漂わせては離す冥界の主、幽ヶ子。視線を向かわせ、その後に未だ木刀を振るい続ける妖夢へと戻す

「筋は良い、振れもない。だが、迷いがある」

「迷い？」

妖夢には聞こえない距離で、聞こえない声量で会話をする二人。不動で妖夢を見続け、思ったことを言い連ねる。

「このままで良いのかという迷いがある。迷いがあれば剣は鈍る。それだけではない――妖夢」

声を少しばかり張り上げて妖夢を呼ぶ。呼ばれたことに気付き、素振りをやめて駆け

寄る。
　かれこれ二時間近くも素振りをしていた妖夢の額には、いくつか汗が流れており、相当の鍛練をしていたものとうかがわせる。それでもなお、疲れを表に見せないかの如く振る舞う
「なんでしょうか」
「単刀直入に聞こう。――何を焦っている」
　刻縁の、鋭く心奥まで見澄まされかねない眼光を持った問いに、妖夢は驚き見開く。
　しかしすぐに俯き、気落ちしたかのように話し出す。
「私は……弱いです、とても。だから早く強くなって皆を守れるくらい――「阿呆」――きゃんっ!?」
　決意を固めたかのような妖夢の頭に、刻縁からの割と軽めの手刀が落とされる。
　突然のことに驚き、痛みも相増ってうずくまる妖夢。涙目ながら抗議の目線を送る。
「まだまだ未熟な上に、皆を守るなどとほざくな馬鹿者」
「っ……」
　刻縁の怒気を浴び、更には自覚していたことさえも改めて告げられ、徐々に眉を下げていく。
「だがな」

二の言葉を聞き、ふと顔を上げる。そこには、毅然としていながらも自身を正面から見ている、遥か先の剣豪の姿があった。

「その覚悟は立派なものではある。その覚悟についていけるよう、私自ら指導するのだ。遠い未来よりも、近い今を見よ。さもなくば、守りたいものも護れぬぞ」

「っ！はいっ!!」

妖夢の元気な返事を聞き、満足げに頷く。

縁側から立ち上がり、側に置いてあった自前の木刀を携えて庭へと歩み行く。

「では、今度は私と打ち合うとしよう」

「お願いします！」

・

・

・

乾いた音が鳴り響く。お互い真剣ではなく木刀ではあるものの、交わす剣撃は真剣そ

のもの。
　刻縁が妖夢のために調節した二振りの木刀。それを今日までな技量を持って容赦のない連撃を繰り出す。しかし、その全てを一刀で、更には受け身に専念した上で片手を背に回した状態という、端から見れば手加減されているようにも見える。
「どうした、筋がぶれているぞ。それでは斬れるものも斬れん」
「っ、はい…っ！」
　最早息も途切れ途切れ、体力も限界に近い。
　それでも、少しでも手を抜けば容赦のない反撃が襲いかかってくる。両手で数えるほどの日数ではあるが、それを痛いほどに知っていた。
「――ふむ。それまで」
「あっ――！……は、い…」
　一閃。それだけで二本同時に撥ね飛ばす。疲れ故に抵抗すらできず、落ちていく木刀をみるしかなかった。
　へたり込み、肩で息をして休みを取る。刻縁が水を差し出し、つかの間の休憩を取り始める。
「あの……」
「……前にも言ったが、先生でも師範でも良い」

「で、では師範と」

おずおずと会話を切り出す。言い辛そうにしていたところ、刻縁から許しを得て一呼吸置く。

以前の、初めての稽古時、彼女は刻縁の力量を視るために試合を申し込み――――一撃で伸されたのである。

目にも見えない神速の一撃に、辛うじて居合剣であると察せれたのみであった。無策にも飛び込んだ自分も自分だが、たった一瞬のアレを避けろというのも土台無理な話である。

そんなこんなで師事することになったのだが、その際どう呼べば良いのかで『師匠』では座りが悪いとのこと故に、今ではこうして呼び方を改めたのである。

「そ、それで、その……今日は、どこが悪かったのでしょうか……」

「ふむ…? 悪いものなどなかったぞ」

訝しげにするも、なんでもないかのごとく告げた刻縁に、妖夢は目を見開く。

「で、でも今日はあんなにも――」

「あれは疲労していたからであろ。当然の摂理だ、そう気負うな」

少し考え、共に縁側に座りながらで、刻縁は講義をし始める。

「ふむ……では妖夢よ。二刀流と双剣の相似点と相違点については話したな?」

「は、はい、確か”相似点は、力まず流れに任せること”。”相違点は、刀は一定方向で西洋剣は跳ね返りがある”。です」

初日に近い時に教えてもらった話を、思い出しながら挙げていく。

刻縁は何も言わずそれを聞いていた。

「そうだ。そしてそれらの模範となるのが――？」

「”舞う”こと、ですね。ですが師範、なぜ”舞う”ことが模範となるのですか？いくら考えても繋がりがあるようには見えないのですが……」

抱いて然るべき疑問をぶつける。舞踏と剣術、そこになんの共通点があるというのか。

出されたお茶をすすり、呼吸を置いて答える。

「端的な答えとしては、”体幹”だ」

「体幹……？」

そう言うと、妖夢の二つの木刀を持って庭に立つ。次いで構え、そのままに説明していく。

「体幹は、いかなるものにも通ずる要素だ。体幹を持つことによって千変万化の動きを為すことができる。特に妖夢、君のような連続剣を持つ者には特にだ」

そう言うや否や、木刀を舞い踊るかの如く振るい、その柔軟な動きを披露する。

ただ立っているだけでも絵になる程であったが、そこにさらに洗練された舞踏が合わさることで、永遠に見続けられるほどの演舞となっていた。

流れるように、ただ一筋の、決して途切れることのない線を描いていくその太刀筋は、まさしく神業にも等しい程である。

「――と、このように。体幹を持つだけでも劇的に違うというわけだ」

「すごい……」

唖然として刻縁を見つめる妖夢。その経験による技量もさることながら、今見せられた美しいまでの演舞に見とれるほかなかった。

そして、自分もいつかあのように動ける――という夢を持たずにはいられなかった。

「す、すごいです師範!!私にも是非すぐに「慌てるな馬鹿者」あうっ」

「まずは休んでからだ。無理は身体を壊す一因にしかならん。よく休み、よく励む。それが近道だ、良いな?」

「は、はい!」

自身の新たなる道に夢を抱き、新たなる師に導かれ、未熟な剣士は更なる強さを得らんとしていた――――。

「それはそれとして、庭師としての役目は忘れておらんだろうな？」
「あっ……」
刻縁の口から盛大な溜息が漏れ出たのは、言わずもがななことであった。

懐古・刻縁：護れなかったもの

――――私は、捨て子だった。

遥か昔、まだ神々が地上によく降り立っていたころの大和の大地。その山奥の小さな村で私は産まれたのだそうだ。

というのも、産まれてすぐに忌み子とされて山奥に棄てられたのだとか。

なんでも、天文学的にも有り得ない、有り得るはずのない日食と月食の同日展開があった時に産まれた子であるから忌み子とされたのだという。

山奥に棄てられた時、産みの母は泣いて謝っていたらしいが、あの当時はどうしようもなかろうな。仕方あるまい。

その後、山奥に棄てられた私を、母上――いや、昔のように、母様と。その母様と父様に拾われて今日に至る。

まぁ、山奥に神代でわかるように、母様と父様は人ではない、妖（アヤカシ）――所謂ところの地上に堕ちた（＝住み着いた）神々の者であり、厳密なとこの妖怪とは違うのだが――であり、以来私は父様と母様の手で育てられてきた。

すくすくと育ち、野山を駆け巡り、同じ妖の里の者達と遊び、語らい、大きくなっていった。

私が拾われてきた日を目安に、事あるごとに様々な贈り物をくれた。刀剣、面、着物、なぜかまだ乳飲み子の時に贈られた盃（後々思えばアホなのでは?と思った）。あの頃は、本当に楽しかった。

まだ人として生きて１６年。丁度齢１６ほどだろうか。その時に父様と母様から妖であることを告げられ、共に生きるかと問われる。まぁ、にべもなく頷くとも。

それから二人の血を飲み交わし、私は半妖となった。かといって何かが変わるでもなく、以前と変わらず里の者達と宴をし、遊びをし、のんびりとした日々を送っていた。

――だがそんな日々も、そう長くは続かなかった。

１００年近く経過した頃だろうか。その日も宴のために、遠く離れた土地に住む者から酒を貰いに、私は里を外れていた。

つい長話をしてしまい、急ぎ足で里へと戻った。その時は乾いた風が吹き、嫌な予感がしていた。まるで、取り返しのつかない何かが起こったような。

ぽつりぽつりと雨が振り出しながらも、急いで私が里へと帰りつくと、そこには――

――

――血に濡れ、視るも無惨な姿へと変えられた、里の仲間達の姿があったのだ。――

一瞬、”それ”が何かはわからなかった。いや、わかりたくなかった。誰も息をしていない、濃密な死が支配する世界だった。

親しかった友の首は落とされ、身体には幾本もの槍と矢が刺さり、血は溜まりとなって充満し、散らばった死体の目には絶望の色のみを写していた。

呆然としながらも、私は生き残りを探して里を探す。生き残りなどいるはずもなく、ただ虚無感をもって歩き回った。

だが、その中で私は見つけてしまう。そう――――血に染まった、先日産まれたばかりの弟と、それを守らんとしていたであろう父様と母様の無惨なまでの死体を。

父様の身体には他の者達よりも酷いと言わざるを得ないほどの傷痕や刺さったままの槍や矢、それらを受けながらも仁王立ちしたままであった。生気のない顔で。

赤子であった弟は、惨たらしいほどにまで痛め付けられ、最早生きていないと断定できてしまう程であった。

母様は、その弟を守ろうとしたのか、両手を広げていたが、その姿のまま樹に槍で張り付けられ、その顔には涙の跡がくっきりと残っていた。

それを見た瞬間、私の中の何かがプッツリと切れたのだ。

慟哭を上げ、何も護れず、何も残らず、全て、全て奪われた。泣いて、泣いて、大切なものを護ることさえできずに失ったことに悔いて悔いてたまらなかった。

三日三晩泣き続け、疲れた私は、一人一人丁寧に、その遺体を埋めるていった。その中で私は、とあるものを見つけたのだ。

それこそが――私が酒を取りにいく要因となった、友和をもちかけてきた人間の飾り物であった。

そこからすぐに、これはその人間が、ひいては人間達がやったのだと察した。そして、私は決意した。

――アノニンゲンドモヲ、ユルシテハナラナイ――と。

同胞達の血に濡れた刀剣のうち、比較的真新しいであろうものを二本ほど身繕い、死体を運んだがために塗れた手で、贈り物である狐面をつける。

これは本来ならば未来のものであり、今でいうところのオーバーなんとかに含まれるのだろうが、その時はそんなことは関係なかった。

ただ、とにかく殺す。それだけだった。

そこからは早かった。まだ残っていた人間達の足跡を追い、我が里を襲った者達の里を見つけ、里の外周に皆から習った妖術で火を回し、何人たりとも逃さぬ陣を張った。

そして、私は里内の人間全員を――殺した。

老若男女関係なく、命乞いをする者も、逃げ惑う者も、子供だけはと懇願する者も皆、殺し尽くした。

殺して、殺して、殺して殺して殺して殺して殺し殺殺殺殺殺殺――――。

徹底的に殺し尽くし、最後に残ったのは、あの憎たらしくも友和を勧めてきた人間だった。

『ば、化け物……ッ。お前達なんて、気持ち悪いんだよ!!消えろ！消えてしまえっ！醜い化け――』

首を跳ねた。そうだ、化け物でいい。最早帰るべき場所も無くし、護るべき者も無くし、抱いていた矜持さえも無くした無意味な復讐鬼。――それが、昔の私だった。

それからの私は、同じくして人間に反感を抱いていた者達を纏め上げ、憎き人間達に宣戦布告をした。大和の地の東側を占領し、西側に集まった人間達と高天原の神々と幾日にも及ぶ戦を始めた。

初めこそ追い込みをかけ、人間達の領域を狭めていったが、後に神々の協力を得た強者達が台頭し始め、こちらが追い込まれる形になっていった。

それでもなお戦線を維持できていたのは、こちらにも強者がいたことと、私への畏怖だろう。

黒き八つの狐尾――母様が金毛の九尾であったため――に、龍の如き角と九つ目の尾――父様が龍の血を持っていた――。血塗れの狐面をつけた怨鬼。その凄まじいプレッシャーは、敵味方関係なく見るもの全てに恐怖を与えていた。

とは言え、だ。それもそう長く続くはずもなく、徐々に徐々に押し込まれ、妖側の強者も、一人、また一人と倒れていった。

ついには私一人となり、その身体に幾千もの矢と幾万もの傷を付けられながらも慟哭する。

『なぜだ…貴様らが……貴様らが！我らを人で無いと切り捨てなければ！人で無いと排除しなければ！我々は何も失わずに済んだのだッ!!なぜだ！なぜ我らを排除した!!そんなに人でない者が醜いか！そんなに人でない者が煩しいか!!ふざけるな……ッ、ふざけるなッ!!おのれ…上面ばかりの下衆共め…。許さぬ……許さぬぞ人間共……我が怨み、思い知れェッ!!』

もはや決死。後のことなど考えてはおらなんだ。目の前の”敵（ニンゲン）”を殺しに殺し、千人から最早数えるのを止めてしばらく。私は、胸に突き立てられた剣を持って最期を悟った。

『っ……なぜ、だ……なぜ……我は、我らは……我が無念は……晴れぬと、言うに……』

『……すまない。だが、眠れ……其方は、休むべきだ……っ』

剣を抜かれ、よろける身体。しかし倒れず、私は、虫の息な身体を無理矢理に動かし、歩みを進める。

『行かな、ければ……逝かな、ければ……』

朦朧とする意識の中で、私はある場所へと向かった。後ろについてくる強者の気配も、その強者が、肩を貸して連れたことも。その時はとにかくどうでもよかった。

――ただ、死ぬ前に、どうしても――

『――嗚呼……嗚、呼……帰り、ました……ミンナ……』

悠然と咲く桜の木。かつて、父母と血の契りを交わしたその場所に、皆の死体を埋めたその地に、私は手を伸ばし、倒れる身体と共に――――意識を、手離した。

こうして、道に迷った復讐に終止符が打たれ、妖は皆その姿を隠し、人と妖の戦は私の死と共に幕を閉じた。

最早伝聞すら残らぬ、昔々の話だ――――。

それから幾星霜、宛のない黄泉路を逝く私を、あんまりに思った天照様が導き、私は

陽の元へと戻ってきた。たどり着いた私を、高天原の神々は手厚く保護し、半ば魂の抜けたかのような私を診てくれた。

怨みは消えない。だがそれでも、私を照らし、導き、居場所を与えてくれた、かの神々の役に立てるなら、と。私は申し出、そして役割を与えられた。

『夜刀神』と呼ばれる、一種のヤンチャした者達をしばくための座に、月詠様揮下の元、配属された。そのおりに、私は神名として、『陰藤夜狐刀命（イトヤコトノミコト）』を授かった――まぁ流石に復讐者を神にするのもどうかという話なので、最低限で『神』を『命』にして頂いたのだが――。

そうして幾年もの月日が経ち、水京という友ができ、人に成り変わってからしばらくして、平城京を見歩いたりだとか、かの偉大にして平安一の腹黒陰陽師こと安倍ナニガシに弟子入りしたりだとか。

また、中華の八卦より、私は『勾陳』の冠を頂き、最終的には『青龍』の名を冠する許しまで頂くことにもなった。

それから更に仲間ができ、部下ができ、己の居場所を確固たるものにできた。

そして近世でも、新たな友ができた。私を宿らせながらも自我を両立させ、そして私を地上へと降ろすことのできた新たなる人の友を。

昔を思えばこそ、数多くの苦難と想いがあったが、それでも、昔があるからこその今の私なのだ。

嗚呼、人の世とは、かくて如何なるものになるかわからぬからこそ楽しいものだ。辛く苦い記憶も、朗らかで暖かい記憶も、私が私であるが故に、とても、大切なものであるな。

「ふふっ、〝なべて世は事も無し〟か。確かに、これはこれで、良いものだ――――」

拾参・鬼の大宴会／花の異変

蝉も鳴き始める初夏の頃、幻想郷は活気に包まれていた。あちらこちらで宴会が盛り、賑やかな祭りとなっていた。

だが、それ以前に、この異常なほどに高まる妖気を覚った者達が、つい先程まであちらこちらへと動いていた。

「――でなんですが、ようやく〝彼〟もこちらに来れると今になって連絡が」

「随分と、遅かったな…」

相変わらずの微笑を携えつつも、器用に苦笑する水京と、幾らかげんなりした様子の刻縁。

彼らの言う〝彼〟とは、外の世界で野暮用があると言い残った、最も猛くありながら豪放磊落なる大鬼――『金熊童子』こと、『金熊　東堂』のことである。

外の世界では酒屋を営み、それを継弟子に任せるためのあれやこれやで、刻縁らとは別ルートで幻想郷へと向かうことになっていた。

「ええ、さらには正体を隠して向こうと同じく酒屋を営むそうで……」

「バレるだろうな」「バレるわね」「バレるな」「……白日」
「ですよねぇ」
皆一同に答え、深い溜め息を吐く。刻縁に至っては頭を押さえる始末である。
元より細かいことだとか、ましてや先々のことなど考えず直進する思考の持ち主である金熊は、兎にも角にも隠し事に向かなかった。
それが今、時が来るまで潜む刻縁らにとっては呆れるしかなかった。
「はぁ……仕方あるまい。計画は前倒しだ」
「よろしいので？」
「逆に聞くが、今やらねばどうなると思うてよ」
金熊の呵呵大笑する姿を思い込み浮かべ、今度は皆苦笑をこぼす。
そんな彼らの頭上のたんこぶな扱いを受ける金熊は今、どうしているのか――――

「おっちゃーん！酒くれー！」「こっちにもちょうだーい」
「うぃおおきに！毎度ォ!!」
無造作に乱れた山吹色の髪に、ねじりはちまきをして、紅葉の色をした羽織を方脱ぎし、筋骨粒々なその肉体を見せつける男――言わずもがな、金熊東堂である。

長年の人里暮らし故に、妖気は人並みに抑えられ、鬼の象徴たる角も巧妙に隠されている。
「うぃ～酔った酔ったぁ。おぅい！あたいにも酒くれよ～！」
「おーぅ！……おう？」
「ん～？……げげっ!?」
片や酒樽を抱えて訝しげに、片や苦虫を噛み潰したかのように顔をしかめる。
「な、なんで居るのさ、〝金熊〟！」
「ほう！久しいの、〝伊吹〟の！何、酒在るところにワシ在りよ！ガハハハッ!!」
腕から垂らす鎖に、様々な形の重りをつけた双角の鬼――伊吹童子こと、『伊吹　萃香』が、金熊を信じられないものを見るかの如く指差す。
対する金熊はさしたる不快感どころか、旧知の友を見つけたことにより、むしろ呵呵大笑している様である。
「し、信じらんない……。流石にあんたが来るのは誤算だよ!?」
「ワシが来んと思うたか！見通しが甘いのぅ！そら飲まんかい、ワシが作った酒は絶品よ！」
「しかもこっちに居座るのかい!?勘弁しておくれよ……」
すっかり酔いが覚めた萃香と、大樽を割って酒を飲み始める金熊。傍目からは異変を

起こしていたはずの萃香の方が不憫に見えたとかなんとか。
後日、ひょっこり人里へ降りてきた萃香が、金熊に捕まりげんなりする姿が見受けられるようになったとか。

～さらに時は流れて～

夏も涼しくなってきた頃、刻縁は霖之介と共にとある地へと赴いていた。
「――些か、長いな。それにしても大きくなったものだな、霖之介」
「老いた人の感想になっていますよ、刻縁さん。それより、無縁塚はこの先です」
長い修行を経て自らの店を持つこととなった霖之介だが、その経営は度々訪れる刻縁から見ても、お世辞にも良いとは言えなかった。
加えて外から落ちてくる”用途のわからないもの”刻縁は外にいたので解るのだが黙っているばかりなので、霖之介の収集癖がこれでもかと邪魔をしていた。
今回は用のついでとして、刻縁が霖之介の手伝い代わりを請け負ったのであった。

そうして他愛のない話をしながら歩くことしばらく。遠くで騒ぐ声が、刻縁の耳に届いてきた。

「――れは――で――」「ですが――でして――」「――りません！――！」「そ――ぁ――」

「ふむん？どうやら、私の用が先らしいな」

「そうですか？でしたら、僕は先に行っていますよ」

霖之介は道なりに、刻縁は道から少し外れた声の鳴る場所へと別れていく。

刻縁が向かう先では、華奢ではあるが厳格な雰囲気を持つ少女と、正座して少女からの説教を受ける背の高い少女の二人がいた。

「――――大体あなたはいつもそうやって「その辺にしてやれ、ヤマザナドゥ」なっ！だれ――えっ!?」

苦笑いを浮かべる刻縁を見て、厳格そうな少女――『四季　映姫』は絶句し、思わず固まる。

口元を魚のように空回すままの映姫に、正座していた少女が顔色を伺う。

「ふむ、そこの――あぁ…小野塚小町、だったかな？」

「は、はひ！」

刻縁に名を呼ばれ、即座に再び背筋をしっかりと伸ばした正座をする少女こと『小野

塚　小町』。
何を言われるのかとドギマギしつつ、次の言葉を待つ。
「あまりヤマザナドゥに世話をかけさせ過ぎぬよう、休息は程々にな」
「は、はい！「では、持ち場へ戻るように」はい……え、それだけ？」
小町の気の抜けた返事慌てた映姫が叱責しかけるも、刻縁がそれを手で制止させる。
状況がわからず小町が口を開けたまま呆けていると、それにあきれた映姫が溜め息をこぼす。
「小町。この御方は高天原の方神が一柱、『東神（あずまのかみ）』こと今代の”青龍”様です。つまるところ、私の上司となる御方ですよ」
「うえぇ!?し、失礼しましたぁ!!」
「構わぬよ、楽にせい」
上司の更に上司に失礼な物言いをしていたことに、大慌てで土下座する小町。
それもそのはず。高天原において刻縁は、地獄を含めた輪廻機構の統括者であり、四季映姫の実質的な上役。現代社会で言うところの、平社員と課長と専務のような立場関係なのだ。
「何はともあれ、壮健そうでなによりよな、”ヤマザナドゥ”？」
「……はい、青り「んんっ」…刻縁様においては、なおご壮健のことと存じます」

小町は、今度は驚き目を見開くしかなかった。小柄ながらもどんな相手にも堂々と説教をするあの映姫が、刻縁の前では借りてきた猫のように大人しくなっているのだから。

これは映姫含めた、主に是非曲直庁の者達がよく知ることなのだが、彼が役職を強調する際は何かしらの苦言があるとか。

加えて刻縁は預り知らぬ話だが、彼の立場も立場であるが為に、割と言葉が他人よりも重くみられることが多いのである。

「お主は何時ものことだがな、説教が長く、くどいぞ。死後を憂い想うが為に説くのは良いが、過度となると億劫になるものだ。それ故、時には待つことも大事なのだ。人はそう直ぐには変われんのだからな」

「は、はい……面目次第もありません…」

刻縁にしおれてうなだれる映姫。ふと、真面目な顔からほんの少しの微笑みを浮かべて、映姫の頭を撫でる。

「お主の尽力はよく知っている。だがな、たまには気を抜く日を置いても良いのだぞ。無理をしても、お主の代わりはおらんのだからな」

「は、はい…ありがとうございます…」

なされるがままに、静かに頭を撫でられる映姫。

そんな光景に、目が飛び出すかとばかりに驚き目を見開く小町。それを感じとったのか、すぐさま振り返った映姫に睨まれ、即座に持ち場である三途の川へと逃げ戻っていく。

呆れてまた溜め息が出てしまう映姫であったが、立ち上がり、刻縁に一礼して自身も戻っていく。それを見届けた刻縁は、自身も霖之介の手伝いのために無縁塚へと向かう。

静かな風の吹く再思の道にて、一人歩み行く蒼き龍。その面に何を想うのか。彼岸花の咲き誇るその道は、ただ静かに導くのみであった。

拾肆・間欠泉異変のその後

圧倒的威圧感の漂う守矢神社の拝殿の中、フローリングの床の上に正座させられる二柱の神。

片や、貫禄のある姿でありながら縮こまって震える大神。片や、帽子についた目を誤魔化しでもしているかのようにさ迷わせる土地神。

その二人の前には、仁王立ちで腕を組みながら、鋭い眼光でその二柱を睨み見下ろす蒼き龍神。

「……さて?」

「ッ!!」

奥の間への襖戸に隠れながらこちらを伺う巫女――『東風谷　早苗』を恨みがましく思っていれば、目の前の男から放たれる重低音の声。

お互いに身体を跳ねらせ、額に流れる冷や汗を感じながら次の言葉をただ静かに待つ。

「此度の件、どう説明してくれる……?」

「いやぁ、えーっと、そのぅ……こ、今回は神奈子が悪いのさ!?」

「ちょっと諏訪子!?」
　発せられた問いに対し、目を泳がせながら土地神――『洩矢　諏訪子』は、視界に入った隣の神――『八坂　神奈子』に全ての責任を擦り付けた。
　それに対し神奈子が憤慨して喧嘩になりかねるも、黙する龍神こと刻縁が右足を打ち付けて律させる。
「黙れ。今はお前達の起こした異変について聞いているのだ」
「そ、それは!外の世界じゃ信仰を集めるのも大変だから此方に来てなんとかしようと――――」
　神奈子が大振りな身振り手振りで説明する。
　曰く――外の世界では信仰が集まりにくく、存在を保てない。だから幻想郷で再び信仰を手にしようとした、と。
　それを一言も喋ることなく、瞑目して聞いていた刻縁。一通り終わって神奈子を見据えて言う。
「そうだな。確かに外の世界では様々な要因もあってか、神霊信仰が薄れている。それ故、此方で存在を保とうとする気持ちもわかる」
「そ、そうだ「だがな?」っ――――」
　諏訪子の必死な同意を遮り、尚も揺らがない仁王立ちのまま、以前間欠泉が噴出した

であろう方向に、ありありと目線を向かわせて言い放つ。
「アレとそれとではまた違う話である？」
「（ガチ怒のやつだコレーッ!!）」
口調の変わった刻縁に、顔面蒼白になりながら自らの危機を察した二柱。しかし、ここで逃げ出せば余計に酷い目に合うことをよく知っていたが為に動けずにいた。
特に神奈子に至っては高天原にいた頃、良くも悪くもお世話になったことが多いがために、顔を上げることすら出来ずにいた。
「のう？神奈子に諏訪子よ」
「ハイ」
「信仰を集めるためなら判る。幻想郷に浮かれたというのも判る。で、あるならば、此度のアレは――どういう理屈かの？教えて貰おうかぇ？」
おぞましいと形容できないほどの圧迫感が襲い、滝のような汗と凍えたかのように震え始める。
刻縁と神奈子の役職的立場というのは、言わば中央の大幹部クラスと地方勤務の役職持ちほどの差。
そも言えば、主神たる天照大御神、ひいてはその兄弟たる月詠大神直属というまでであるがために頭すら上がらないのがこの刻縁なのである。

「そ、それは、そのう……ちょっとした戯れというかなんというか……」
「ほう？戯れと申すか」
「「ヒゥッ」」
　更に強まった威圧感に、か細い悲鳴を上げてさっきよりも縮こまってしまう二柱。
　しばらく続いていたが、ふと溜め息とともに一気に空気が弛緩する。恐る恐ると言わんばかりに顔色を伺ってくる二柱。
「まぁ、過ぎたものは仕方あるまい。今回は何も言うまいてよ」
「「そ、そっかぁ――「しかし、だ」ッ!!」」
　今度は先程までとうって変わって笑みを浮かべる刻縁。
　だが、二柱は見えていた。その笑みが、かなりひきつったものであると。そして、それが怒りを含んだものであると。
「勝手に我が友たる”ヤタガラス”の名を使わせたこと、どう責を取る？」
「あ、それは神奈子が悪いから。私知ーらない」
「す、諏訪子ぉぉ!?」
　口笛を吹きながら、割と本当に関係ない諏訪子はそっぽを向く。そんな諏訪子を問い質さんと神奈子は立ち上がろうとするが、首根っこを刻縁にしっかりと掴まれる。
　さも関節部の油の切れた人形の、軋む首の如く回して後ろを見る神奈子。そこには―

――良い笑顔をして佇む刻縁が居た。
「では神奈子、少しばかり裏手でゆるりと――――語り合おうではないか？」
「アッ、アッババッババババ（あ、死んだわ、私）」
その後、守矢神社の裏手である妖怪の山の山奥にて、これでもかというほどの何とも形容し難い凄惨な悲鳴が、三日三晩続いたとか。
なおその頃、地霊殿では――――
「――ふぇっくちゅっ！」
「？珍しいわね。風邪でも引いたの？」
「やだなぁさとり様、そんなわけないじゃないですかぁ～」
ふにゃとして返事を返す件の”ヤタガラス”こと、『霊烏路　空』と、そばで読書をしていた『古明地　さとり』。
余談ではあるが、この二人がよもや地上でお空について話されており、ましてやお空自身が引き金で一柱の神が頭陀袋にされているなど知るよしもないのであった。

「捕捉しておくが、地獄にすむのは”八咫『烏』”で、高天原の神鳥の方は”八咫『鴉』

”であるからな」
「誰に向かって言っているんですか当代…。あとそれ、単なる表記違いではありませんか？ほぼ同種ですし」
そんな会話もまた、余談である。

拾伍・神仏宗教合戦・裏

厭世感の漂う人里を上空から眺めながら、湖から溢れ出た霧によって隠れる屋敷を視界の端に見る。

その人里では、以前来た妖怪寺の者達や、最近蘇ったという奈良時代の偉人達、そして今代の博麗の巫女があれやこれやと騒いでいた。

「何をやっているのだ彼奴らは……」

「なんでも、宗教合戦らしいですよ、当代」

術式の点検と補強を終えた水京が刻縁の隣に並ぶ。流し目で下を見れば、違和感のない程度で霧が増えていき、ゆっくりと屋敷を覆っていく。

こちらに来てから度々行っているこれは、刻縁らがこの幻想郷において目的のために発動しているもの。これにより、一時的にではあるが、刻縁らの存在は直接関わったものを除いて悟られることがないようになっていた。

「……あとどのくらいは持つ？」

「おおよそ、五っ六つほどかと」

さらに激しさを増していく人里を余所に、誰にも悟られることのない二人が思案する。

霧の湖の水を掬い、掌から零れ落とす。一息つき、いたずらっ子のような笑みを浮かべて振り替える。

「ふむ、ちとアレに混ざってみるか？」

「露見しますよ？」

的確かつ速攻で帰って来た水京の呆れ声に、うなるような声をあげて引き下がる刻縁。それから盃を取り出して水面に傾ける。

空だった盃の底からは次々に水が流れ出し、湖に張られた術式へと浸透していく。最後の仕上げを終わらせて盃をしまう刻縁。

「――待てがいい、そこな怪しい者共」

「む？」「はて？」

振り返って見れば、まさしくな効果音が鳴りそうなポーズを取る面を被った少女――『秦こころ』が立っていた。

半透明な扇子を広げながら格好つけるこころと、どう反応していいかわからない刻縁と水京。両者らの間に、なんとも言えない沈黙が流れる。

「……おい、なんか言え」

「…すまない…？」

「謝るな、惨めになるだろう」

無表情かつ抑揚も少ないため、微妙な圧を感じていた。とは言え、頭につけている面がどういう感情なのかを表しているため、大体どう思っているのかは判る。

憤慨したように地団駄を踏むこころ。ひとしきりやって落ち着いたのか、一息吐くと、今度は半透明な薙刀を刻縁に向ける。

「お前達はこの上なく怪しい。というわけで打ちのめす」

「…突拍子もない上に言いがかりも甚だしいな……いいだろう、相手になってやる」

腰に差した刀の鍔を持ち、半身を下げていつでも抜ける体勢を取る刻縁。対するは、狐の面を着けて薙刀を構えるこころ。

緊迫した空気が流れる。互いに動きのない時間が過ぎて行く。

そんな中、静かに吹いた一辻の風。初めに動いたのは――――こころであった。

「せい、やぁ！」

棒読みに似た抑揚で繰り出されるその技は、その口調とは裏腹に鋭く、刻縁が生きてきた中でもかなりの遣り手とも言えた。

しかし、刻縁もまた、繰り出される薙刀を柳のように躱していき、神速の抜刀を見せる。

危機を感じたこころは、攻撃を中断して深くしゃがみ、それをバネとして高く跳び上がる。その直後、こころのいた場所に逆袈裟の斬撃が通る。
「危ない危ない、これは出し惜しみなしだな」
「……悉く此方の台詞よな。――――行くぞ、加減は無しだ」
刀身の見えない速度で納刀されていた刀を、抜刀の構えながら駆け、距離を詰めていく。
そして互いにカード・・・を取り出して紡ぐ。
「スペルカード発動、秘剣『閃々・桜吹雪』」
「スペルカード発動、怒面『怒れる忌狼の面』」
口を開けた狼のようなオーラを纏い、刻縁へと突っ込んでいくこころ。対する刻縁は、未だ納刀したまま駆けりながらも、身体を深く捻り沈めて――鍔を弾く。
その次の瞬間には、眼に見えぬほどの剣閃が五つ・・駆け抜け、喰らいつかんとしていた狼を霧散させる。
「!?」
「油断大敵だぞ。――――スペルカード発動、
炎上『黒縄火炎』」
刻縁がスペルカードを発動させた直後、こころの足元に漆黒の炎が柱となって立ち昇

る。あわや直撃したかに見えたが、ギリギリで回避していた。
しかし炎はその一撃では終わらず、次々に足元から吹き出してくる。その全てをなんとか避けきった、と思った背後から刻縁が現れる。
「甘い、スペルカード発動、憂面『杞人地を憂う』」
今度は刻縁の足元からオーラを纏った大量の翁の面が立ち昇る。
咄嗟に後ろへ跳ね返ることでそれを避けるが、避けた先にも立ち昇っていた。だがそれを、空中で一回転しながら切り裂くことによって突破する。
避ける中で時に先回りされ、時に足元から吹き出されなど、あたかも翻弄されているかのように見せていた。さうして刻縁の体勢が一瞬崩れたのを、こころはみのがさなかった。
「決める――――スペルカード発動、
『仮面喪心舞　暗黒能楽』」
スペルカードの発動と共に、周囲を面が取り囲む。そして、こころが必殺の一撃を加えようとしたその時、刻縁は一枚のカードを取り出す。
「スペルカード発動――――

神器『アメノムラクモ』

刻縁の手刀が振り下ろされると同時に、光の奔流に飲まれていく――――――――。

「――――――――はっ！」

「起きたか」

意識が覚醒すると共に勢いよく起き上がる。はらりと落ちる濡れた手拭い。掛けられた声の方を見ると、木陰に座る刻縁の姿。
「安静にしていないとダメですよ?当代のアレ、もろに当たったんですから」
「……なぜ、助ける?」
まだ休ませるべきと判断していたこころの問い掛けに、呆気にとられた反応を返す水京。
目を瞬かせて柔和な笑みを浮かべると、こころの介抱を続けながら宣う。
「そうしたいと思った以上に、理由はいりますか?」
優しそうな雰囲気に、嘘偽りのない言葉。
大きく目を見開いたこころは、休まされながらも二人に頭を下げる。
「私の早とちりだった、すまない」
「気にするな。誰にでもある」
なんでもないかのように返す刻縁の言葉に、緩んだ息を溢す。
そうして介抱されながら、こころは気になったことを聞いていく。
「ここで何していたの?」
「ちょっとした調べものだ。丁度終わったところでお主に襲われて、な」
「う、申し訳ない……」

軽く笑ってから「気にするな」と言われ、茶化されたとわかったこころ。拗ねたような反応を見せるも、向こうの余裕は変わらなかった。

「最後の、何？」

「『神器』だ。それ以下でも以上でもない」

なんでもないかのように告げられたことに、このろは驚きを見せる（驚きの面を被っただけだが）。

神々が鍛え、振い、振るわれる武具である神器。それを扱うということは、目の前の相手は神に連なるもの。もしくは――――

「神様？」

「あながち間違いではないな」

言外に神に連なるものと公言し、そして敵対していたのが神であることに、こころは驚き焦った。

神に牙を剥くのはご法度中のご法度。それを知らずとは言え剣まで交えていたことに、焦りを抱くのも当然のことであった。

「謝罪はいらんぞ。私としても、久々に身体を動かせて楽しかったからな」

「随分と久しいですからねぇ」

賛同するかのような水京を余所目に、ただ眉尻を下げて肩を落とすこころ。

そんなこころに、刻縁は声を掛ける。
「そうさな、まぁあれだ。今は故あって表に出れんが、いずれ大手を振って歩ける時には、君の能楽を見せてもらいたいのだが、構わんか?」
「もちろん。我が能楽、心行くまで楽しんで頂きたい」
形は違うとは言え、神前で能楽を披露できるということに、表に出るほど沸き立つこころ。
その後、今回のことは他言無用と取り決めて、二人と一人は別れ去る。
とは言え、今回の戦闘はどこからどうみても目立つほどに激しいものであった。しかし、幻想郷ではこちれを気にする空気は全くなかった。
なぜならば――――戦闘中は水京が結界を張って、不可視化や戦闘の余波を流していたからに過ぎない。そして何よりも、彼らが霧に張った、後々の異変の元となるこの霧――――『忘却の霧』によるものでもあった。

拾陸・都市伝説なるもの

屋敷の中、半ば談話室のような役割となっている会議室にて、椅子に座り悩ましげなため息を吐く刻縁の姿。

その目線の先には、どこか神々しさを持った宝石のやうな煌めきを放つ銅鏡と、片手程度の大きさながらに多分な妖気を含んだ手鏡があった。

「……なぜ雲外鏡がここにある？」

「さぁ？いつの間にか紛れ込んでいたとしか」

そう答える水京の周りには、撫でられて喜ぶ犬と狐と狸の三匹。見た目は普通の獣だが、相当に妖気を含んでいた。

否、妖気ではない。これは妖気と似て非なるもの。言うなれば――――”恐怖”。”畏れ”とも言うべきものである、と、刻縁はその直感で察していた。

「ふむん……これが噂の『都市伝説』、であるか」

そう、いま巷では『都市伝説』に関するあらゆる噂が飛び交っていたのである。

曰く――――自身を見つけた幼子を執拗に追い掛けては拐う女、井戸の奥よりうめく

声、見上げるほど巨大な緑色のヒトガタ等といった、様々な『ウワサ』が飛び交っていたいた。

つまるところ、刻縁らの持つこれらもまたその『都市伝説』の一つであり、何を隠そう――

「――よもや、『合わせ鏡』に『狐狗狸(こっくり)さん』とは、な」

「らしいと言えばらしいわよねぇ」

頬杖をついて、戯れる水京を見る狂骨。その姿は、普通の獣と何一つ変わらないようにも見える。

だが、よくよく見れば完全に地に足をつけているわけではなく、ほんの少しばかりほど浮いているのだ。それが意味するのは、『この獣達は霊である』ということに他ならない。

「ははは……少々わんぱくではありますが、可愛らしい仔達ですよ」

「お主は良かろうが……なぜよりによって私が『合わせ鏡』なのか」

はぁ、と深いため息を溢す刻縁。そうして雲外鏡から目線を外し、次いで視たのは、妖しく輝く球体――”オカルトボール”と称されたものである。

巷で流行る『ウワサ』。それらが具現化したものを呼び寄せるこのオカルトボール。明らかに厄ネタであることは解りきっていたが、刻縁ははじめ、このような物を持つつ

もりはなかったのだ。
それこそ、道端に転がっていたものを拾い上げ、訝しげながらもよろしくないものと理解し、すぐに捨てたのだ。だが帰って来てみれば、捨てたはずのオカルトボールが門前に転がっていたのである。
「……主」
「む？崇羅か、何事だ」
「…門前…捜索。推測……現代人（外の子）」

皆の顔が真剣味を帯びたものとなる。紫か賢者の招待ないしは採集（誘拐）がなければ、入ることすら能わぬこの幻想郷。
そこに、誰の招待もなく外の世界からの者が入り込んだということは、それ即ち、外法を使っているということ。
「視に行くぞ」
「私も参りますよ」
どちらにしろ着いてくるだろうと思い、懐にオカルトボールを仕舞って、屋敷から大門へと向かう。
大門の近くでは、如何にも外の世界での服装であるかのような格好をした少女が、あ

ちらこちらをうろうろとしていた。
「其処な者、此処で何をしている」
「うおぅ!?ビックリしたぁ、どこから現れたのさ」
多少過剰な反応を見せる少女。だが、その身の内に宿す”神秘”――否、”深秘”を、刻縁は悟っていた。
二人は警戒しつつも、それを悟らせない気配の出し方をして、外の世界から来訪した少女に問う。
「問うているのは此方だ。質問には答えよ」
「うえぇ?うーんと、どう言えばいいかなぁ……うん、ちょっと探し物しててさ?――――”オカルトボール”って、知ってる?」
少し困ったような様子を見せる――しかし、二人はその一瞬を見逃さなかった。
おどけたように振る舞う目前の少女の眼が、一際鋭くなったことに。
「ふん……青二才め。探りならもう少し上手くやれ」
「えぇっ、悟られるの早くない…?」
警戒度をグンと上げた刻縁に対し、少女はげんなりしたように、それでいてしくじったと言わんばかりの顔をする。
しかし、ため息一つで気持ちを切り替えたのか、懐から板状の何か――恐らくは外の

世界の情報端末――を取り出してマントを翻らせる。
「まぁいいわ、バレちゃあ仕方がない。
――――私は宇佐見菫子!!貴方の持っているそのオカルトボールを手に入れ、私はこの幻想郷を手に入れる！」
「ほざいたな、小娘。我が郷里に仇なす者がどうなるか、その身にしかと刻み付けてやろう」
「些か貴女はオイタが過ぎましたね。加減無しですので、どうぞ、死なないように」
静観していた水京も、どこからともなく双剣を取り出して構え――――るように見せて、陰で三匹を呼び出していた。
二人の高まる闘気と覇気と、そして荒ぶらん程の神威をひしひしと感じ、菫子は覚る。
――これ、手を出したらアカン人達だったわ――と。
「な、なんの、先手必勝!!スペルカ――――」
「スペルカード発動――――

召霊「拾円ぽっちじゃ物足りない」」

董子の言葉に重ねるようにして、水京が先手を打つ。

水京の陰から、彗星のように飛び出した”何か”が董子へと当たり、更にその後ろに待ち構えていた”何か”が今度は上へと吹き飛ばす。最後に上からさっきまでのとは別の”何か”が落ちてきて董子を撃墜する。

地面へと激突した董子は、肺の中の空気が一気に吐き出しかねない衝撃を覚える。よろけながら立ち上がると、ふと懐が寂しく感じ、物をしまっていた場所をはたく。

「お探しのものは此方ですか？」

「へ？――うぇ!?な、なんでぇ!?」

呼び掛けられた水京へ顔を向けると、彼の手には董子のスペルカードやアイテム、さらには集めた”オカルトボール”といった所持品全てが集まっていた。

ニコニコとした表情を崩さない水京に呆気にとられていると、背後より強烈な気配を感じる。それに振り替えると――――目の前には、『鏡に映った自分の顔』があった。

「加減せんと言われただろう。スペルカード発動――――

＊昨日と明日の顔合わせ＊」

「ひぐっ……ひぐっ……うぇぇぇん、ごめんなさいいいい……」
「当代……流石にやりすぎかと……」
「うむ……私もそう思った……」
刻縁らの目の前には、号泣し、あまりの恐怖に失〇名誉保護の為、伏せ字してしまっている菫子がいた。それに加え、オカルトボールも、中に溜められていたもの全て霧散

され、一つ残らず木っ端微塵に破壊された後のものが散らばっていた。
ただ、発動された刻縁の『オカルト』が相当なものだったらしく、流石に大人げないということで、二人共に良心が痛んでいた。
「はぁ……あー、菫子であったか？」
「ひぐっ……ひうっ、はいぃ……」
刻縁（トラウマ）に呼ばれたことで跳ねる身体。それに苦笑するも、刻縁はそのまま話し続けていく。
「そう恐れるな、もう何もせんよ……。幻想郷は特別なルールによって成り立っている。むやみやたらに〝外〟と繋げられるのは困る、解るな？」
「は、はい……」
すっかり怯えきってしまった菫子に、困ったように頭を掻く刻縁。水京に助けを求めるも、我知らぬと顔を逸らされる。
ため息一つ吐いた刻縁は、ふと菫菫子に、手をかざすと、なにやら光の粒子が菫子へと入っていく。
「っ……ふぇ？」
「お主に、眠る合間のみ此方へこれるよう術をかけた。無論、軽度ではあるが加護も掛かっているからな。悪影響はない……はずだ」

まさしく開いた口が塞がらない菫子。先程まで敵対していた相手に、なにより、この幻想郷を破壊しようと考えていた相手にそのような塩を投げるのかわからなかった。

しかし、刻縁の言葉を反芻するうちに、ある言葉に引っかかる。

「”加護”、って……」

「む？あぁ、言ってなかったか。私の名は、『青龍寺　刻縁』。外の世界では夜刀神なぞと呼ばれていた時もあったが――――まぁ、”天照大御神の部下”、で、あろうな」

思った以上のビッグネームが出てきたことに、菫子は驚きを隠せず、絶叫を挙げてしまう。

そして菫子は思った――――今後、彼らにケンカを売ることだけはやめよう――と。

拾漆・宣戦布告

山奥にある、小さな屋敷。縁側にて茶を啜る紫と、その後ろに静かに侍る二人の式神。ふと、紫の隣に〝扉〟な現れる。

その中より現れたるは、鮮やかな色合いの狩衣を来た女性と、烏帽子をかぶり、片方は笹、もう片方は茗荷の葉を持つ二人の少女。

「やぁ、待たせたかね？紫よ」

「別に待ってないわよ、隠岐奈」

尊大な台詞を放つ狩衣の女性――『摩多羅　隠岐奈』。それに対し、まるで辟易しているというべきか、はたまたいつも通りかと呆れているかと言わんばかりの反応を見せる紫。

そんな紫の隣の縁側に座るや否や、控えていたはずの式神――『八雲　藍』がお茶と茶菓子を盆に乗せてきていた。

「おや、気が利くね。君みたいな従者が居て、紫が羨ましいもんだよ」

「恐縮です。隠岐奈様」

ケラケラと笑う隠岐奈に、慇懃とした礼で返す藍。そのまま静かに下がり、待機する。
貰ったお茶を一杯飲むと、ほぅ、と一息吐いて紫に顔を向ける。
「それで？君から私を呼ぶという珍事があるからには、何かあったのだろう？」
「――大結界が切り裂かれていたわ」
空気が固まる。口元に運ぼうとしていた二口目を止めて、先程までの愉快そうな表情を一転させる。うって変わって真面目な表情となり、紫に問う。
「それは、真か？」
「えぇ。とは言っても、私も気付いたのはつい最近。痕跡も巧い具合に隠してあって、後手になってしまったわ」
やれやれと言いたげな仕草を見せる紫。しかし、その仕草とは裏腹に、その顔は焦燥にまみれていた。
それもそうだろう。気付かぬ内に大結界を切り裂かれ、あまつさえその痕跡を巧妙に隠す者など、相当の手練れに限られる。
「誰だ？」
「知らないわ。でも、候補はいるわ」
自らが愛し、尊ぶこの幻想郷。それを害せんとするものならば容赦はしない。この二人はその気持ちに関しては嘘偽りなく、合致している。

紫は、知らないと言いながらも、該当するであろう、過去の著名な存在達を思い出していく。

「現状、幻想郷に入れるのは限られているわ。相当名の在る妖怪(モノ)か、あるいは――――私達の同類、かしらね」

「――――”賢者”、か。しかし……ならばやはり誰だ?」

顎を抱え、思い出せる限りの相手を思い出す。そして、該当するであろう、ただ一人の存在へと行き着く。それと同時に目を剥き、紫に振り返る。

そんな隠岐奈の反応に、紫は静かに頷く。まるでそれを、肯定しているかのように。

「えぇ、その推論は当たりでしょうね。そんなことができる”賢者”は只一人。もし来ているならば、誇張無しに幻想郷最強とも言える存在。――――”神々由りの粛清者”、『青龍寺　刻縁』。彼だけよ」

二人は幻視する。蒼い装束をたなびかせ、威風堂々と言うべき風格を持った彼の存在を。

そして、それは現実のものとなる――――。

「流石は紫と言ったところか。時間は掛かれど、僅かなものから私を当てることになるとは」

「っ!!」

陰からの声。どこに声の主がいるのかと探し見れば、屋敷の庭、森に通ずる林間より、此方へと歩み寄る者が一人。

はためくは、さながら龍の髭を模しているかのように、二房伸びた蒼き髪。腰には刀を差し、その威風はまさしく恐れ多き者の威を持つ、やや男性寄りの、中性的な顔つきをした者――――刻縁である。

「久しいな、紫。そして隠岐奈。やや理由(わけ)在って暫し隠頓していた。だが――この青龍寺刻縁、ここに帰郷し仕った」

「おぉ、まさかお主まで来ていたとはな、刻縁。しかし……何時から居たのだ?」

目を丸くして驚く隠岐奈と紫。従者のうち、確りと面識のある藍も驚きはしていたが、残りの三人は初めて見る人であった。

それはさておきと、隠岐奈が親しみを以て刻縁に問いかける。その答えに、苦笑するかのような反応を見せつつ刻縁は言う。

「今の先代の頃からだ。来たばかりでな、歪になっていた我が力を戻すのに、些か時を掛け過ぎた」

「――――そう、そんな前から居たのね」

何か思うことがあるのか、紫は静かにそう溢す。それを気にした風もなく、隠岐奈と

刻縁は語らう。
その光景を余所目に、紫は懐から扇子を取り出しては広げ、刻縁を睨むように見る。
「それで――――なぜ今更出てきたのかしら？」
「知れた事を。何、私も異変の一つ、起こして見せようかとな」
紫の問に、刻縁の笑みが深まる。紫は直感で、今までの異変とは比にならない、壮大なことが起こるという予感がした。
そう感じつつ、そのまま視線で続きを促す。
「今は随分と前になるが、紅き霧のときより、つい最近の隠岐奈の異変、そして、幾ばくか前の地獄霊の暴走。なかなかに興味深いものであった」
「そうか？まぁ、そうであろうな。それで、お前はどの様な異変を興すつもりなのだ？」
前のめりの視線になる隠岐奈。それとは対照的に、ますます鋭い目つきになる紫。隠岐奈は興味とその真意を探り、紫は不信感を持つ。
刻縁が一つ、策師の如き笑みと共に、その異変を語る。
「私が狙うは――――『幻想郷の生命の永遠化』。そして、『幻想郷という世界の独立』である」
「「――――」」
にわかに殺気立つ。隠岐奈は壮絶な笑みを浮かべ、紫は冷ややかな空気を放つ。対す

る刻縁は、それを受け流すかのように、涼しげな顔で佇む。
しばしその空気が続き、やがて、今まで沈黙していた紫が、その口を開く。
「それは、そうね。いわゆる――――〝宣戦布告〟、なのかしら？」
「答えねば判らん、とでも言うつもりか？」
刻縁から、友と相対する笑みが消え失せ、それはまさしく、『神』と言わんばかりの無の顔となって紫に答える。
その答えと共に、二人から常人ならば即座に卒倒するであろう殺気が無差別に放たれる――――――が、刻縁が放った、自らを示すかのような圧倒的な存在感によって消し飛ばされる。
「戯け、手緩いのだ貴様らは。闘争無くしてヒトは生きず、渇望無くしてヒトは活きぬ。その腑抜けた牙を、無慈悲に抜かれたく無くば、死に物狂いで私を止めてみせるがいい」
そう言うや否や、刻縁の身体はたちまち水の塊となって潰れる。転移か、あるいは分身か。何はともあれ、後手に回ってしまったのは確実。
そうして紫達から幻想郷の有力者達へ、刻縁の存在が語られることによって知れ渡り、それと同時に、突如として巨大な屋敷が現れる。

その夜、美しいほどの青さを持った満月が現れ――――――

幻想郷の、時が止まる。

拾捌・登場人物　設定拾

〈主要人物〉

・青龍寺　刻縁
二つ名：東守龍神、神々由りの粛清者、輪廻の番人、青い桜のお兄さん、など。
種族：龍神（青龍）
性別：無（※精神は男性寄り）
能力：『魂魄を還す程度の能力』
危険度：低～高
友好度：やや高～普通
主な活動場所：東幻楼、人里、冥界、など
本作の主人公枠。外の世界より、幻想郷へと帰って来た、幻想郷創設に関わる”賢者”の一人。幻想郷における生命輪廻のシステムの設定をしたのが彼。

元は『高天原』における、天照大御神直属官吏の一つ、『四神』の一角、東方の神獣『青龍』。古き神代の頃から生き続けている、正真正銘の努力型エリート。

過去に忌み子として捨てられ、現在でいうところの妖怪の前身、俗世に堕ちた神である”妖”に育てられた経緯も持つ。その後、その育ての親諸共に親しかった者達を皆殺しにされたことによって復讐を決意するものの、やむなく討伐された。

死後、その運命に嘆いた神々によって救われ、長き時をかけて恩返しをし、今の位に就いている。また、人の美しさ、尊さを知り、下界で人の子に生きる術を教えていたこともある。

本名は、『青龍寺（せいりゅうじ）　辰神代右臣将（たつみだいうじんしょう）　刻縁（こくえん）』。神としての名は『夜刀神（ヤトノカミ）』。高天原にいた頃は、人の手に負えないようなモノの粛清・処理を行っていた。その為、実力は計り知れない。

また、平安時代にて、彼の有名な『安倍晴明』を師と仰ぎ、時に力を貸していたりしていた為、陰陽術や巫祓術も一等級のものを会得している。

文官としても過不足ない腕だが、本分は上記の通り武官であり、机上事はあまり得意ではない。とは言え、やるべき仕事はきちんとこなし、その上で翌日の負担を減らせる程度にはできている。

武人的だが自由人な気質を持っており、基本的には、教えを請われれば丁寧に指導し、

悪しきことは厳粛に、自他共に罰する。口数は少なく、硬いイメージだが、実は宴会好き。ただし、必要のないときに騒ぎまくる輩は嫌い、あまり良い顔をしない。昼間は時折、樹上で昼寝していることがあり、割かし何処にでも居る。幻想郷の、数少ない常識人枠の一人でもある。

性別は神となった際に廃棄したが、一度、人として転生した際には復活し、再び戻ったことで、生殖器官や性欲は無いものの、精神的には男性に近い。やろうと思えば女性にもなれる。

見た目は、やや男性寄りの中性的な青年。髪はやや黒に近く藍色で、襟足が二房だけ腰まで伸びた軽い長髪。多少跳ねが掛かっているが、ストレートに近い。サラサラしてる、手入れは特にしていない。

幻想郷の中では長身だが、霖之助より背がほんの少しばかり小さい。服装は、それぞれ青を基調としており、陣羽織に似た濃紺の背広の上着、その下に通常のものより少し裾が長いジーンズ素材風のアウター、その下に七分袖な黒のインナーという三重構成になっている。

下は、膝から下の中が広くなっている、ジーンズに近いものであり、革ブーツを履いている。たまに草履だったり一歯下駄だったりする。

腰には二振りの刀を差し、青い方が”神刀”『青龍丸　蒼凪（あおなぎ）』。白い方が『夜照《やで

らし》一文字』という。

前者は天照大御神より下施された、文字通りの神の刀であり、普通の刀より五寸ほど長い。『斬りたいモノのみを斬る』という性質を持ち、文字通り刻縁の奥の手にして愛刀。

後者は、刻縁がまだ神になる前の、育ての親とその周りの友人達からの贈り物として貰った剣。それを打ち直して刀にしただけの、至って普通の刀。

右利きかつ一刀流・居合を得手としており、神速の抜き打ちを以て一撃必殺の剣を放つ。

能力である『魂魄を還す程度の能力』とは、その名の通り、『魂＝肉体的な影響』と、『魄＝精神的な影響』のそれぞれに作用させるものである。

『魂魄を還す』とは、即ち『輪廻の流れ』であり、不老不死の発現から、記憶の故意的な忘却、果てには能力封じなど多岐に渡る効果を生み出す。

ただし、能力を使うにあたって、使う対象の『流れ』を読み解かねばならず、あまりに『流れ』が強大であると、逆に押し戻されてしまう欠点がある。

また、下手な者が使うと、相対的に自らに効果が跳ね返ってしまうこともあり、一朝夜では扱いきれない能力でもある。

好きなもの：リンゴ、ドラゴンフルーツ、楽しい宴会、静かな場所（森など）、刀剣観賞、ひたむきに努力する者、
嫌いなもの：所構わず喧しい者、執拗に語りかける者、努力を嘲笑う者、『四神』西の”白虎”

・想川（あいかわ）　水京（みなきょ）
二つ名：柔和なる策士、薬学皇帝、笑顔の腹黒参謀、など。
種族：神霊
性別：男性
能力：『太極を視る程度の能力』
危険度：低
友好度：やや高
主な活動場所：東幻楼、人里
刻縁と共に幻想郷へやって来た、刻縁の腹心の一人。参謀担当であり、実質Ｎｏ．２である。
その正体は、紀元前の中国史における五帝の一人、『黄帝』その人である。桃源郷で釣

り三昧なところを刻縁にスカウトされ、日本に来たことでその名を改めた。本名『姫帝鴻』。

普段は糸目の柔和そうな笑みを常に浮かべており、丁寧な言葉遣いかつ、好々爺然とした態度で接してくれる。ただし怒らせた時は話は別で、目を薄く開いて真顔になり、普段からは考えつかないような苛烈さを見せる。

”怒らせると怖い人”の定型的な例である。

研究者気質で、屋敷では普段、薬学の研究をしていたり、歴史書などを纏めていたりする。たまに薬品精製をしていることがあり、失敗して研究室を爆発させていることがしばしばある。

医学に関しては、そこらの藪医者よりも真っ当で、即座に特効薬だったり治療だったりではなく、原因・過程・症状をよく見て判断し、それに合った診察を行う。他の作品によくあるマッドサイエンティスト的なことは、信条に反するので絶対にやらない。

使う武器は弓矢だが、遊び心を加えてしまった結果、分離して双剣になる弓になった。また、弦を手繰ることにより、ヨーヨーのように双剣を振り回すこともでき、端から見れば演舞に近い姿となる。

それに加えて、各種効果の付与された護符を放つこともある。一例としては、『行動封印』、『付与爆破』、『通電麻痺』などがある。さらには、精製した薬品を矢に塗ることで

毒矢代わりになるなど多才を極めている。
能力である『太極を視る程度の能力』とは、万物の真理たる『太極』を、視ることによって理解し、そこから派生するもの全てを悟れるという能力である。
視たものが『水』であれば、それから派生する『霧』・『氷』・『雪』など、その性質全体に作用させることで即効性のある変質を行うことができる。
ただし、『熱湯』などの温度操作はできない上に、みえない場所にあるものは変質させれないという欠点がある。また、視界に強く作用されるため、目潰しをなどをされると能力の使用すらままならなくなってしまう。
見た目としては、眼鏡をかけた糸目で好々爺然とした笑みを浮かべており、白を貴重とした、中国風のツーピース的なローブを来ている。
白髪ではあるが自前であり、決してストレスなどで白くなったわけではない。目は基本的に糸目だが、開眼した際には金色の眼を見せる。
なお妻子持ちなのは公然の事実。

好きなもの：妻と子供達、未知なもの、河の流れる音、仲間達、天真爛漫な子供達
嫌いなもの：裏切り、仲間達への侮辱、常に煩い者、人の話を聞かない者、シュールストレミング

・狂骨太夫
二つ名：黒衣の骸天女、骸骨遊女、スーパーシスコン姉者、お裁縫マスター、など
種族：妖怪（餓者髑髏）
性別：女性
能力：『死霊を喚ぶ程度の能力』
危険度：中
友好度：普通
主な活動場所：東幻楼、人里、冥界
刻縁と共に幻想郷へやってきた、刻縁の腹心の一人。四人の中では最年少であり、紅一点でもある。
元々は江戸時代の繁華街である吉原のＮｏ．１遊女。だがしかし、自身を見初めた侍が己を裏切り、最も大切にしていたものを目の前で奪われたことで妖怪に堕ちた。
その後、暴走していたところを、たまたま下界の視察に訪れていた刻縁によって鎮圧・救出されたことによって惚れ込み、追い掛けて今に至る。

高下駄を履いているため長身に見えるが、実際は周りとそう変わらない背丈。吉原口調は長年を渡って直してきた為、だいぶ抜けてはいるが、感情が昂ると戻ってしまう。

吉原遊女のように、艶やかな黒髪を高纏めにしているが、伸ばし続けていたことで、ほどくと平安時代の貴女のような長さになっている。

普段は優しくたおやかな淑女の鏡のような”お姉さん”だが、命よりも大切な双子の義妹達が絡むと一気にポンコツ化する、残念美人である。

ペットとして猫又の『瑠璃』という三毛猫がおり、人化することもあるが、基本的には猫の姿になって、しょっちゅう狂骨太夫の部屋で寝転んでいる

源氏名は『夕霧太夫』、本名は『宇治　春華』。京都出身の商家の出だったが、両親が事故で早くに他界してしまったことで孤児となり、吉原に売られた。

『死霊を喚ぶ程度の能力』とは、狂骨太夫の種族である『餓者髑髏（がしゃどくろ）』に由来し、死んだ者達の霊を呼び寄せ、骸に宿すことで”竜牙兵”として使役するもの。

能力によって作られた眷族の中でも、強力なものには固有名がある。絵巻物などに描かれているような体躯が巨大なものは『皇骸（おうがい）』、幽鬼然とした、背の伸びた鎧武者を『餓羅（がら）』と呼び、側近代わりとしている。

なお、二名とも魂がしっかりと宿っており、狂骨、ひいては刻縁に強く忠誠を誓っている。

もちろん、能力に頼りきりというわけではなく、本人も冷気を放つ妖刀の類である、『凍閃華　幸継』という銘の薙刀を振るう。これに狂骨太夫の持つ妖力を流し込むことで、周囲の空気を急速冷凍し、巨大な氷塊を発生させたり、氷の刃を生み出したりとできる。

また、凍閃華と同じく屋敷の蔵に死蔵されていた武扇を振るうこともある。鉄扇並みの固さを誇るが、市販の扇子と大差ない重さという摩訶不思議な扇子。中には、”女性が妖怪となるも、青い龍に包み込まれ、また人に戻る”という小さな絵物語が描いてある。

好きなもの：青龍寺　刻縁、義妹達、子供、歌を歌うこと、演舞
嫌いなもの：嘘つきな男、義妹達の陰口を言う者、ゾンビ、押し付け系聖職者

・夜九　陣兵衛
二つ名：夜叉剣豪、剣聖金狐、最後の柳生流、放浪の異端狐、など
種族：妖怪（金狐／九尾狐）
性別：男性（女性にもなれる）

能力：『殺気を消す程度の能力』
危険度：低～中
友好度：普通～やや低
主な活動場所：東幻楼
刻縁と共に幻想郷へやってきた、刻縁の腹心の一人。武術や軍事関連の顧問として刻縁に仕えている。
元々は何の変哲もない狐だったのだが、妖気に当てられて金狐となり、その後、偶然垣間見た人間の剣術に魅せられて人化の術を会得し、剣術を極めたことによって九尾の狐へと変生した。
本来、妖術を得手とする妖狐系とは、異端児とも呼ばれるほど乖離し、妖術よりも剣術を貪欲に鍛え続けたことによって、剣聖とまで呼ばれるほどになった。
刻縁に仕えるようになったのは、室町時代に出会った際、刻縁の剣術に一目惚れし、近くで仕えることによって剣について学び、より高みを目指すため。
その忠義はそこらの武士よりも強く、その剣技は比類なしとされる。元々の名は無く、刻縁からは『陣兵衛』と名乗れと言われたため、そう名乗っている。
時は流れて江戸時代、柳生流剣術の師範、〝柳生但馬守宗則〟と出会ったことで、埋まらないナニカがはまった彼は、より一層剣術に勤しみ、ついには妖怪の身でありなが

ら柳生流剣術の免許皆伝を戴くことになった。
性格は武人そのもの。忠義に厚く、修練に励み、礼節を貴ぶ。基本的に口数は少ないが、的確かつ思慮深い一面を見せる。一刀流使いだが、必要に応じて二刀流も扱える。
見た目は、長い黒髪だが、九つにバラける後ろの毛先だけ金色となっている。濃紺の胴着を来ており、時折着流し姿な時もある。普段は狐面で素顔を隠しているが、その下は端正な顔立ちであり、無口さも増して美青年感を出している。
『殺気を消す』とは己の挙動を相手に悟られにくくすること。つまり、剣術の極致、『無念無想』のソレであり、気配の前兆も無い一撃を以て相手を倒すことができる。
また、この能力は剣に乗せる殺気を消すことによって、例え柳生流剣術一本だとしても、次手を読み難くし、相手の呼吸を乱すことが可能となる。
ただし、野生の勘などで動くタイプにはあまり効果がなく、更には自らにしか効果がないため、多対一では意味がなく、使い処が限られてくる。

好きなもの：剣術・剣技、茶道、礼節を貴ぶ者
嫌いなもの：無礼な者、和を乱す者、剣を蔑ろにする者

・葛城　崇羅

二つ名：北野の土蜘蛛、始まりの風魔、勘違い犠牲者一号、ゲンジ＝スレイヤー、など

種族：妖怪（土蜘蛛）

性別：男性

能力：『呪と怨を操る程度』

危険度：やや高

友好度：低

主な活動場所：東幻楼、幻想郷全体

刻縁と共に幻想郷へやってきた、刻縁の腹心の一人。主に暗部顧問として活動し、諜報活動から暗殺まで多岐に渡る。

元々は北野天満宮の裏手にある洞穴に住んでいた、豊穣を招く土地神。しかし、同時京の都を荒らしていた『土蜘蛛＝玖賀耳之御笠』と間違われ、源氏棟梁の”光源氏”こと『源　頼光』に寝込みを襲われ、その首を河原に晒された。

それ以来、『源氏＝理不尽なクソッタレ脳筋野郎共』と認識し、黄泉の隅で怨嗟を募らせていた。刻縁と出会ったのは丁度その頃で、周りから迷惑がられていた怨嗟を発散させるという口車に乗って仕えるようになった。

戦闘スタイルはトリッキーかつ執拗なもの。クナイに自らの糸を引っ掛け、それを四方八方に投げることでクモの巣のような逃げ場のない空間をつくりあげ、腰にある短刀型の蛇腹剣で敵を討つ。

さらに、着物のような装束の中から手裏剣やクナイなどの暗器を投げつけ、煙玉や毒煙玉など多彩な手段を持つ。ただしマンガによくあるような”土遁”だとか”火遁”だとかは使わない。少なくとも、普段は。

基本、無口かつ無愛想。口を開いたとしても単語単語の必要最低限で済ませる。その分仕事は迅速かつ的確であり、忍の名に恥じない働きを見せる。

が、酔っぱらうと饒舌になり、やれ源氏のせいであーなったこーなった、最終的には源氏に対する恨み言を愚痴のように吐き続けた上で悔し泣きし始めてしまう始末。なお、その翌日は二日酔いで倒れてしまうので休み以外では飲まない。

好きなもの：特に無し
嫌いなもの：源氏一族